



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代アメリカ政党政治空間の転換可能性 : バラク・オバマの場合
Author(s)	石神, 圭子
Description	研究ノート
Citation	北大法学論集, 58(6), 161-204
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32576
Type	departmental bulletin paper
File Information	vol58-6_p161-204.pdf



現代アメリカ政党政治空間の転換可能性

——バラク・オバマの場合——

石
神
圭
子

目次

序

第一章 アメリカの「希望の星」とアメリカ政治社会の現在

第一節 オバマの登場と基調演説の衝撃

第二節 アピールとしての「楽観主義」——アメリカにおける「個人主義」の変容

第三節 現代アメリカ政党政治の展開

(一) 政党政治における「人種」とアメリカ社会の実相——「脱産業社会」の矛盾

(二) 人種平等と反動がもたらした政党政治空間

第二章 八〇年代政党政治における「人種政治」の限界

第一節 ジェシー・ジャクソンの選挙戦略と「失敗」

(一) ジャクソンのとった戦略とは

(二) ジャクソンの「希望」は誰に向けられていたのか

第二節 「人種政治」の限界——「共通の基盤 (common ground)」を求めて

第三章 政党政治空間の転換可能性

第一節 オバマにおける公的活動の内面化——「記憶の共同体」への道筋

第二節 「一つの国民 (one nation)」と現実としての「人種」

第三節 現代アメリカ社会の「見えない他者」——「連帯の理念」の現実化は可能か

結

序

二〇〇四年七月二七日、ボストンで行われた民主党党大会における基調演説の舞台に、大歓声の中、一人の黒人が姿を現した。細身の体に端正な顔立ちが一面を埋めつくす「OBAMA」プレート⁽¹⁾の青に映え、佇まいは自信とエネルギーにあふれてい

た。四三歳の誕生日を一週間後に控えたこの若き黒人政治家の演説は、参集した多くの人々の心を激しく揺さぶり、ある者の頬には涙が伝った。彼こそが、二〇〇七年一月には翌年の大統領選挙に出馬を表明することになるバラク・オバマ連邦上院議員候補であった。⁽²⁾

近年、アメリカにおいて党大会は、民主党であると共和党で

あるとを問わず、候補者選出をめぐる討議の場から、全国的に党の政策を訴える場へと変化し、現在ではそれは、党の中心的なメッセージを国民に伝えるための四日間³にわたる無料のメディアイベントと化している。会場ではその間、毎日二〇人ほどの演説が続くが、オバマが演説した二日目は特に大物の演説の予定もなく、中だるみの感があつた。しかし彼が登場したとたん、会場の雰囲気は一変し、聴衆は耳を澄ましたという⁴。オバマは少し早口だが言葉は明瞭であり、間の採り方も抜群で、初めての大舞台とは思えない落ち着きがあつた。演説のタイトルは「希望がもたらす大胆」⁵(The Audacity of Hope)⁶だった。

周知の通り、二〇〇七年夏の段階において、オバマは二〇〇八年の大統領選挙候補者として民主党予備選への出馬を表明しており、同党ではクリントン上院議員に次ぐ支持率を得ている人物である⁷。現在連邦上院においてただ一人の黒人議員でもある彼は、二〇〇七年五月の『タイム』誌“The TIME 100”（世界で最も影響力のある一〇〇人）にも選ばれ、人々を惹きつける弁舌と楽観的で大胆な動員アピールが評価されている⁸。しかし、政治的経験も少なく、イリノイ州上院議員でしかなかった彼の名を一躍全国的なものにしたのは、まさにこの二〇〇四年民主党大会での基調演説であり、その成功によって、彼の一

挙一動に注目が集まるようになり、知名度は格段に上がったといわれる。

本稿は、現代政党政治の文脈を俯瞰しつつ、現代アメリカの公共道徳の変容と人々の政治との関わり方の変化に焦点を当てながら、オバマの登場が従来の政党政治構造と政治空間⁹の転換の可能性を含むものであることを明らかにするものである。

以下第一章では、オバマの基調演説が人々に与えたインパクトと彼のアピールの含意を示すとともに、六〇年代以降の現代政党政治と市民社会の実相との整合性を探ることによってオバマ「現象」の歴史的・社会的素地を浮き彫りにする。第二章では、かつて同じく黒人でありながら全国政治の世界で注目されたジェシー・ジャクソンのアピールとオバマを比較することにより、オバマが直面した戦略上の問題と可能性を論じ、政党政治空間の転換への道筋を示す。第三章では、オバマが自身の個人的経験から得た「共同体」の現代的意味に着目し、現代アメリカ政治における個人と公共政治の間をつなぐ理念の生成と重要性を強調したうえで、オバマが従来の政党政治空間に風穴を開ける可能性を十分に備えていることを示す。

第一章 アメリカの「希望の星」とアメリカ政治社会の現在

第一節 オバマの登場と基調演説の衝撃

党大会でのオバマの演説内容は、ユニークで衝撃的なものであった。冒頭、彼は自らの両親の物語を語り始めた。彼の父はアフリカ、ケニアの小さな村で生まれた。祖父はイギリス人に仕えるコックで、自分の息子に夢を託して懸命に働いた。やがて息子は、アメリカへの奨学金を手にした。一方、母はカンザス州の小さな町の白人家庭に生まれた。祖父は第二次世界大戦に参加し、G.I.法（復員兵援護法）で教育を受け、F.H.A（The Fair Housing Act：公正住宅法）によって家を得た。そしてより大きな機会を求めて、一家はハワイへと向かった。彼もまた娘にアメリカの夢を託した。

人種も育った国も異なる二人はハワイ大学で出会い、愛し合い、やがて結婚した。そして、彼らは生まれた子供を、スワヒリ語で「（神による）祝福」を意味する「バラク（Barack）」と名づけた。寛容なアメリカでは、その名前が成功の妨げとなることはない信じて。

壇上でオバマは力をこめて言う。「私がここに立っている、それは私自身がアメリカの歴史の一部であることを意味しています。……他どこでもない、このアメリカにおいて可能な物語なのです」⁽¹⁾。

オバマは当時、イリノイ州から立候補した連邦上院議員候補であったが、イリノイ州上院議員（シカゴ、サウスサイド第一三地区選出）に初当選したのはわずかに八年前の一九九六年であり、政治家としては未だ熟練とはいえない人物であった。したがって、その彼が党大会の基調演説の場に立つことは、極めて異例の抜擢であった。もっとも、彼はハーヴァード・ロースクールを次席で卒業した弁護士であり、シカゴ大学で教鞭もとるエリートでもあった。さらにイリノイ州議会では、人種問題や教育問題など、リベラルな立法のリーダーシップをとれる人物として注目を集めた。⁽²⁾その後、二〇〇〇年には連邦下院議員に立候補するも、民主党予備選で現職に敗れるという経験をする。このときオバマを破ったのは、元ブラックパンサー党のボビー・ラッシュであり、ラッシュは六一%の票を獲得して圧勝、オバマの得票率は三〇%あまりにとどまった。⁽³⁾選挙戦でラッシュは、オバマの浅黒い肌と華麗な経歴を、「not black enough（黒人として十分ではない）」と攻撃した。そして、黒人居住

者が多数を占めるいわゆる貧困地区であるサウスサイド選挙区の有権者も、圧倒的な支持を得ていた現職のラッシュ以上に、オバマを「我々の」代表とみなすことができなかった。⁽¹³⁾ また、オバマ自身が省みるように、この選挙戦は政治的戦略やメディア的配慮において、しばしば彼の政治的経験の少なさが露呈した戦いであった。⁽¹⁴⁾

しかしそれから三年後、彼は「最後の挑戦」⁽¹⁵⁾として空白のできた連邦上院の議席を目指す。民主党予備選では強力なライバルであったブレア・ハルが家庭内暴力を記事にされたことでオバマは圧勝し、続いて共和党予備選を勝ち抜き、強敵と言われたジャック・ライアンも妻への性的暴力を暴露され競争から脱落すると、オバマの知名度は一気に上がり、期待は急激に高まっていた。⁽¹⁶⁾ その後、共和党は代替候補として急遽、黒人でメリーランド州在住の保守派ラジオコメンテーター、アラン・キイスを擁立したが、そもそもキイスは過去にメリーランド上院議員を務めており、出馬条件であるイリノイ州の居住権を指名と同時に得たような人物が立候補者となることに関し、当然ながらシカゴのメディアは批判的に報じていたのであり、したがって、メディアを味方につけたオバマの勝利はほぼ確実と見られていた。こうした中で民主党大会での基調演説は、イリノイだ

けではなく、それまで彼の名を知らなかった全米の有権者にも大きなインパクトを与えたのである。

オバマ自身は、政敵がスキャンダルによって次々と脱落していったこの選挙戦を、のちに「幸運な出来事 (a fluke)」⁽¹⁸⁾だと回顧しているが、党大会演説を経た十一月の選挙結果は、二つの点で重要かつ興味深いものである。第一に、彼はイリノイ全体の民主党支持層の九四%、共和党支持層の四〇%、無党派の七四%を獲得し、全体では七〇%の得票率で当選した。⁽¹⁹⁾ その結果、アメリカ史においては五人目、再建期以来三人目の黒人上院議員となった。⁽²⁰⁾ 第二に、彼は、人種の割合で言えば白人の六六%、黒人の九二%、ラティーノの八二%を獲得、また性別・年齢・収入に関してはいずれもほぼ七〇%以上の票を得ていた。オバマが圧倒的支持を得て勝利したイリノイ州は、シカゴを中心とした北部では歴史的にリベラル層が圧倒的に多く、民主党の地盤となっているが、とうもろこし畑の広がる南部は未だに伝統的保守層が根強く、⁽²²⁾ 従来黒人政治家が南部で票を得ることはほとんど不可能とされていた。近年における大統領選挙の全国的構図——保守的な南部（フロリダを除く）、穀倉地帯およびロッキーマウンテン地域で共和党が終始優位にたち、民主党は北東部、イリノイ州およびカリフォルニア州で優勢という色

分け⁽²³⁾——を思い起こせば、たしかにオバマの言うとおりイリノイは「アメリカの縮図 (a microcosm of country)」⁽²⁴⁾である。しかし彼はこの選挙で、サウスサイドの黒人ばかりでなく、従来黒人政治家を支持したことのないイリノイ南部の白人保守層——共和党支持層——の支持も得たのであった。もちろん、連邦制をとるアメリカにおいては、大統領選挙と議会選挙とは個人にとつての投票の意味や基準が異なるということに、十分注意する必要はある。しかし、オバマが「アメリカの縮図」たるイリノイにおいて圧倒的勝利を収め、現在の上院における唯一の黒人議員となったことは、アメリカの大統領選挙において固定化の傾向にある全国的構図の転換可能性を示唆している。

だが、そればかりではない。基調演説後のオバマに対するメディアの反応をみていくと、彼の演説と成功を現在のアメリカの政治空間、あるいは政党政治空間を転換するものと見て、その可能性に期待する者がいることに気付く。たとえば、二〇〇四年八月二日付のワシントン・ポスト紙の論説は、オバマの基調演説をこう論評した。「彼の演説は、敵対し、ばらばらになった断片 (個人) を、政治家やメディアによって破壊されてきたという文脈に (巧みにも) 据え、我々を再び一体とする道を開

いたのである」⁽²⁵⁾。また、二〇〇五年四月の『タイム』誌「The TIME 100」も、すでに彼を「二大政党の分裂を修復するだけでなく、人種的緊張の緩和をも可能にするキング牧師以来の人物」⁽²⁶⁾と評価し、彼に大きな期待を寄せている。

では、オバマの登場と基調演説は、現代アメリカの政治空間において、いかなるインパクトを持ったのだろうか。まずは、オバマの基調演説がどのような視点からアメリカ人の公共意識に訴えたのかを明らかにしよう。

第二節 アピールとしての「楽観主義」

——アメリカにおける「個人主義」の変容

上記のワシントン・ポスト紙の論説は、党大会でのオバマをこうも評価した。「彼は私たちにあることを再確認させた。我々は、『個人』 (one) として政治的同一歩調の中で共生の可能性を見出す存在ではなく、相互に敬意を払う隣人 (mutually respectful neighbors) なのだということである」⁽²⁷⁾。

ここにおける「個人」と「隣人」が、アメリカにおいていかなる含意を有するのかを考える際、まずもって想起すべきは、一九世紀前半にアメリカを訪れたフランス人、トクヴィルの観

察である。周知のように、アメリカにおける「諸階層の平等」⁽²⁸⁾ほど、彼の目を引いたものはなかった。諸階級によって構成されていた旧社会に比して、ここでの諸階層の平等という根源的事実は、個人の精神の独立と、自律的個人からなる社会という観念を生み出していると、トクヴィルは指摘した。そして、かかるトクヴィルの認識を踏まえ、アメリカが封建主義の伝統を欠く(それゆえに反動の伝統も欠く)との歴史認識にたちつつ、そのような社会の精神的構造を、「自然的自由主義」⁽²⁹⁾と名づけて歴史解釈の基本的視座としたのがルイス・ハーツである。彼によれば、アメリカ社会の公共道徳に深く埋め込まれているのは「ロック的信条」⁽³⁰⁾、つまり生命・自由・幸福の追求の権利は自然状態における個人の財産所有のうちに具体化されるとの信条であった。ロックの思想は、アメリカ社会において、個人の自由や競争のための機会、そして政府の干渉に対する抑制に、(非合理的にせよ)浸透しているという。かくしてアメリカ国家を構成しているのは「個人」であると観念され、「個人の自律性」は、アメリカ人によって何にもまして賛美されることになる。しかし、トクヴィルはここに民主主義の「病理」を見た。孤立した個人が私的利益に閉じこもり、自己と政治生活の関係を個人的目標の追求という観点からのみとらえることの結果、

他者配慮の精神が失われ、公共精神が蝕まれていくことを、彼は深く憂慮したのである。

とはいえ、トクヴィルはアメリカに個人主義的傾向のみを見出したわけでもない。彼の見たアメリカ人は、自発的にアソシエーションを作り、他者との連携の中に社会生活の価値を見出す傾向も備えていた。⁽³¹⁾身分制から解放され、すべての人が平等である民主主義社会においては、個人は自律的で理性的に私的利益を追求する存在であるが、それゆえに彼らは他者と連携しなければ生活できない。なによりも「ロック的信条」のもとでは、国家は市民の生活を最小限しか保障しないからである。したがって、アメリカでは公的問題にコミットしていくことにより、市民としての義務や責任の精神を涵養していく「心の習慣」が発達する。トクヴィルによれば、最初には必要から一般の利益を考えた人々が、次には自ら進んでそれに意を用いる。合衆国の住民が有している自由の諸制度と政治的権利は、各市民に自身が社会の中に生きていることを不断に想起させ、市民としての義務や連帯感を習慣化させている。⁽³²⁾一八三〇年代に彼がみたアメリカは、個人主義の行き過ぎを緩和する解毒剤としての「心の習慣」を持ち合わせていたのである。初期入植者たちの前には、広大な荒野が広がっていた。そこに文明を築くため

には、人々が最大限に協力することが重要であるが、そのためにはできるだけ多くの成員による決定への参加が、協力を調達する最も確実な方法の一つであった。⁽³³⁾ただし、タウン・ミーティングに具体化される直接民主主義の理想は、小規模で同質的な自治体の存在を不可欠の条件とする。つまり、ジェファソンが主眼とした共和主義を支える市民的徳性の維持は、有徳な農民に支えられた小規模な自治体においてのみ可能となる。トクヴィルは個人主義の帰結を警戒しながらも、ニューイングランドでのタウン・ミーティングのような地方自治体の諸行事に関わるアメリカ人の真剣さを見ることによって、アメリカ民主主義の将来をいくぶん楽観的にみていたのである。

しかし当然のことながら、現代のアメリカ社会は規模や社会的構成において格段に拡張・多元化・多様化し、もはや人間が相互の連結に自覚的にコミットしえないような「大きな社会」⁽³⁴⁾として立ち現れる。そしてこうした社会において、集団的規範や国家に縛られずに自律的に行動しうる個人は、アメリカの民主主義を支えてきた相互的人間関係から離れ、自己の内面化された価値体系の中で生活するようになったのであり、かくて生じる個人主義の強化傾向に警告を発し、「大きな社会」をいかにして「善い社会」へと変えていくのかとの問いをあらためて

提起したのが、ベラーだったのである。⁽³⁵⁾

では、オバマはその基調演説で、アメリカにおける「個人」と「隣人」（あるいは「他者」）の問題をどのようにアピールしたのだろうか。彼の基調演説の最大のアピールポイントは、自身のユニークな人種のバックグラウンドとアメリカンドリームそのものである家族の歴史を、率直かつ雄弁に語るだけではなく、政治的変化の必要性をあくまでも「楽観的」に主張した点にあったとされる。つまり、現在のアメリカが抱えている問題をとりあげ、それをアメリカが「成し遂げられないこと」として象徴化するのではなく、彼自身の存在を「アメリカが成し遂げてきたこと」として象徴化し、人々に「希望」をアピールしたのである。たしかに父と母、そしてオバマ自身の物語は、移民を受け入れ、労働する者には社会的階梯を用意し、属性による差別を不当なものとする、「アメリカ」そのものであった。しかし、その「楽観主義」の裏に、ラディカルな個人主義の行き着く先への憂慮と、アメリカ人に潜在するはずの「心の習慣」への訴えかけが読み取れるのも事実である。

まず、オバマは、現代アメリカにおける都市の貧困やヘルスケア、雇用の問題の深刻さを指摘するが、それは政府によってすべて解決できるものではなく、しかもそう考えるのは彼だけ

ではないという。「私があつた人々——小さな街でも大都市でも、そしてレストランやオフィス街でも——、彼らは政府がすべての問題を解決してくれるとは思っていませんでした。……インナーシティでは、人々は政府のみが子供の教育の担い手ではないと自覚しています。かれらはまず「親」としての義務を重要だと考えているし、テレビを消し、彼らの人生に可能性を与えねばならないと、そう感じています。……彼らは気づいてゐるのです。(They know those things.)」(傍点石神、以下同様)⁽³⁶⁾

では、政府が問題の解決の主体ではないとすれば、それは単に個人の問題に帰されるのか。オバマはそうではないと考えている。「誰もが深い意識下において、感じているはずです。(自分の)優先事項の順番を少しでも替える (with just a slight change in priorities) ことができれば、すべての子供たちが人生に希望をもち、すべての人々に機会のドアが開かれている社会は可能なのだということを。誰もが、より善い方法を知っているのです」。

このようなオバマの認識を考える上で、ベラーの指摘は示唆的である。彼は『心の習慣』（原著一九八六年）において、トックヴィルの現代性を明瞭に語っている。ベラーたちは、一九七九年から一九八四年にかけて二〇〇人のアメリカ人にインタ

ヴューを行い、家族やコミュニティの生活、政治、道徳などに對する信念や希望を聴取した。その中のひとり、大企業のとっぷとして成功したビジネスマン、ブライアン・パーマーは、離婚を契機に人生の「優先事項 (Priority)」を私的利益の追求から子育てと家庭生活へのコミットメントへと改め、そうした生活に満足していた。物質的な成功と、それ以上に確かなものを掴み取った彼は、「個人的」には勝利者である。しかし、彼が自分の生き方を述べるとき、「価値観」や「優先事項」という言葉をもちだしてくるばかりで、それらを共有されるべき大きな目的意識や信念の枠組みの中に位置づけて正当化することはない。⁽³⁸⁾ペラーによれば、アメリカの個人主義には二つの流れがある。第一に、個人が社会の中であくまでも自己利益を追求していくことをよとする「功利的個人主義」の流れであり、第二に、個々人が内側に秘めているはずの個性や真実を開花させること、つまり自己を自由に定義し、自分が人生に何を望んでいるのかを発見することに主力を注ぐ、「表現的個人主義」の流れである。ブライアンの人生に起きた変化は「功利的個人主義」から「表現的個人主義」への変化であって、その変化は自分の外部の価値体系やコミュニティの規範とは関係していない。ここにおいてペラーが問題とするのは、個人主義に基づく

アメリカ人の倫理的・道徳的基準が、他者の基準や関心事から全く独立しているということである。自己を内側に拡張するという思想は、社会的コンテキストの中で拠るべき道徳的基準や共同体の意味を必ずしも明らかにしてくれないのである。よって、オバマのいう「優先事項の順番を少しだけ替えること」も、もし自律的個人の自己実現の手段としてのみアピールされるのであれば、少なくともトクヴィルやペラーが期待する社会と価値体系の転換に対して、さほど大きな寄与はなし得ないということになるであろう。

しかし、彼はこう続けている。「シカゴのサウスサイドで字も読めない子供、薬代を払えない高齢者、法の適正な過程(due process)なしで捕まるアラブ系アメリカ人の問題は、我々自身の問題ではないでしょうか」。「個人がそれぞれの夢を追うことができ、しかし、すべての国民はアメリカという国に住む一つの家族であるという連帯の意識こそがアメリカの基本的信条であり、アメリカを機能させてきたもののなのです」。

たしかに、個人主義の積極的側面がアメリカ社会に果たしてきた役割は大きい。しかし個人主義の言語は、しばしば自己から「他者」を切り離す。オバマの考えでは、「優先事項の転換」は教育や均等な機会という問題とつながっていないければならな

い。ところがアメリカの現状は、「全体」を忘れることによって人種や党派に分裂するという代償を支払っている。そうした認識に立った上で、彼は「政治」に何ができるかを問う。「シニズムの政治か、希望の政治か?」。彼は、黒人奴隷や移民の原動力となってきたアメリカの理念の中に「希望」を見据えるが、それは、「困難の中で見る希望 (Hope in the face of difficulty)」であり、「不確かさの中で信じる希望 (Hope in the face of uncertainty)」でもある。先人たちはその「希望」によって、アメリカの政治文化そのものを豊かなものにしてきたのである。オバマによれば、「希望の政治」は、アメリカを悩ませてきた社会問題群に無関心を装い、知らないところで知らないうちにそれらが解決されるのを望むような「楽観主義」によって是实现しない。雇用やヘルスケアの問題は、知らないことにしておけば誰かが解決してくれるという「盲目的な楽観主義 (blind optimism)」によつては、決して解決しないのである。

ちなみに、ペラーは『善い社会』(原著一九九二年)の中で、オバマの演説に先んじてこう指摘している。「アメリカ文化における個人主義的な考え方からすると……私たちは制度を利用し、自分が選んだように生きることができる。私たちはそう信じている。これは、往時以来のフロンティア的心理の今日的表

現である。……しかし、今の時代に、移住できる西部などありはしない。かつてない複雑な相互関係の時代に、他人と関わり合いにならずに暮らせる土地などありはしない。ほとんどの人は、このことに気づいている⁴⁰⁾。個人としてのアメリカ人が、自分たちの「頭越しに」遂行される政府や財界の操作をあたかも自分に関係ないことのように見過ごしているのは、世界から称賛されているアメリカ民主主義の力を自ら放棄しているも同然である、と。

基調演説におけるオバマは、トクヴィルやペラーを引用することも、個人主義の脅威を直接指摘することもない。しかし、個人と国家（政党）の間に「他者」を挿入し、個人の意識をより大きな社会的コンテクストのうちに導いた点にこそ、オバマのアピールの核心がある。単なる政府の受益者ではない自律的個人が、「大きな社会」の中で「盲目的樂觀主義」に陥らずに「公共の善」を見出していくことは可能か。この問いに対してペラーは、アメリカ人は心の底でその必要性に「気づいている」と言い、そこに個人主義の行き過ぎを超えた「善い社会」の可能性を見た。オバマもまた政治家の視点から、「公共の善」とは何かを議論する空間を基礎とした「善い政治」を実現するために、アメリカ人に潜在しているはずの「連帯意識」に訴えたのであ

る。そうした信念を裏付けるかのように、オバマは二〇〇五年の著書『希望がもつ大胆さ——アメリカンドリームの再生への考察』(*The Audacity of Hope: Thoughts on Reclaiming the American Dream*)で、以下のように記している。「我々の政治経済システムは、個人としてのアメリカ人が信奉する個人主義の価値に依拠している。……しかし、我々が本能的に個人主義的であるならば、我々自身の本来の姿を見誤ることになる。我々の個人主義は、常に共同社会の価値に結び付けられてきたのである。健全な社会であればどこでも依拠している、接着剤としての価値に⁴¹⁾」。

第三節 現代アメリカ政党政治の展開

（一）政党政治における「人種」とアメリカ社会の実相——「脱産業社会」の矛盾

オバマが「我々はアメリカという国に住む家族である」というとき、そこには、自由主義社会アメリカにおいて中核的な価値をもつ個人主義が「大きな社会」という現代的条件の中で「他者」や「全体」を看過してきたという現実への憂慮とともに、アメリカのもう一つの伝統である連帯や公的意識の涵養という

市民的精神を呼び起こすことによって、「善い社会」の実現は可能だと考える樂觀的思考が存在する。こうした「連帯意識（あるいは統合）」の喚起や樂觀的「希望」の提唱によって、オバマは人々を、現代アメリカにおける新しい政治空間へと導いているのである。

そして、このようなオバマに対して人々が実現を期待するのが、前述の通り二大政党の分裂の修復と人種の緊張の緩和である。では、彼が個人に向けて訴える「連帯」と「希望」は、そうした「分裂」と「人種の緊張」を含む政党政治にとって、いかなる意味をもつのであろうか。そもそも、二大政党政治における「分裂」は、「人種」の問題とどのように関わっているのだろうか。ここで、現在見られるアメリカ政党政治空間がいかにして形成されてきたのかを確認する必要がある。まずは、現代アメリカ社会における争点としての「人種」のもつ意味と、政党政治構造とのつながりを明らかにしよう。

なお、本稿では、個人レベルでの「人種主義」の問題と、政治構造における「人種」の問題は根本的に異なっているとの前提にたっている。投票行動研究者であるハックフェルトらは、たとえ個人レベルでの差別意識が穏健なものであっても、それは（政党）政治構造との連結点において、人種意識の激しい分

極化を促す場合があると指摘する。⁽⁴³⁾ 筆者は、アメリカ政党政治における争点としての「人種」問題は、個人レベルでの「人種主義」に安易に還元することなく、人種主義と「平等化」をめぐる政治的展開の中で理解されなければならないと考えている。

さて、カーマインズとステイムソンによれば、六〇年代以降において、人種問題に関する態度が政党のイデオロギーを決定する中心要素となり、有権者の政党選択の判断材料となってきたという。彼らによれば、有権者の間で政党支持と人種政策に対する見解の相違が著しく拡大し始めたのは一九六四年のことである。⁽⁴⁴⁾ すなわち、この年の大統領選挙において、人種平等を掲げる民主党リンドン・ジョンソンの地すべりの勝利の陰で生じた、極端な差別主義者である共和党バリー・ゴールドウォーターの南部における健闘が、主に人種的平等に反対する民主党支持者が共和党保守に合流する道を開いたのである。さらにこうした社会的リベラリズムへの抵抗は、六八年大統領選挙を機に民主党から離反してアメリカ独立党を結成したアラバマ州知事、ジョージ・ウォレスが民主党白人右派の結集を促し、民主党の分裂が決定的になるにつれて成功を収めていった。⁽⁴⁵⁾

しかし、そもそもなぜこのような明瞭な形で「人種」が争点

化し、それが政党支持における決定的な「クリーヴィッジ」になり得たのだろうか。この問いに答えるために、「人種」の「平等化」の過程を、アメリカ政治社会の歴史や実相に即して、いま少し詳しく見ておこう。

第二次大戦後の西洋民主主義諸国における「階級」の衰退と新しい社会構造を基礎とした争点の登場が指摘されてすでに久しいが、そうした議論の代表格である、イングルハートが提示した「脱産業社会論」は、戦後の経済発展とそれに伴う中・高等教育の普及、さらにマスメディアの規模と多様性の増大などのシステムレベルにおける変化が個人レベルでの価値観・信念・行動を大きく変えたとの認識に立つ。⁴⁶⁾ 脱工業化社会、つまり第三次産業就業人口の比率が高く、教育を受ける人口の比率が高く、情報化ならびに都市化が進行した社会においては、労働者の組織率が低下し、労働者連合を決定的な政治的基盤にすることは困難となる。さらに、特に戦後の経済成長によって社会全体の生活水準が上昇すると、物質的に豊かな環境下に育ってきた世代は、それ以前の世代とは異なる価値観（脱物質的価値観・post material value）を持つようになる。⁴⁷⁾ 彼らはたとえば労働者ではあっても、政治システムにおいて物質的な争点——労働環境、社会保障、あるいは失業補償など——よりも、むしろ

脱物質的な争点——環境や人工妊娠中絶——に関心を示するのである。たしかに、五〇年代から六〇年代にかけて、アメリカにおいても国民の中産階級化は順調に進み、「パンとバター」というミニマムな社会的価値は生活の「質」という価値にとつて代わられた。多くの人々が郊外住宅地で「理想の生活」を手に入れ、未だ郊外での生活を享受していない人々にとつてもその夢は実現可能な夢となったのである。さらに、イングルハートは第二の革命的变化として、脱工業化社会における一般大衆が政策決定に対してますます活発な役割を果たし、「エリート挑戦的」活動に携わるようになると指摘している。実際、この時期のアメリカでは、ラルフ・ネーダーが環境運動を開始し、自然保護運動、消費者保護運動も盛んに起こっている。市民運動がそれぞれ多様な争点を選挙や立法過程にもちこみ、下からの改革を実現させる、という注目すべき動きが始まったのである。

しかし、この議論は政党システムにおける「階級」の衰退は説明し得ても、「人種」の著しい隆盛を説明するにはなお十分である。多くの先行研究は、六〇年代以降に人種をめぐる二大政党間の政策上の相違、およびそれに関する民主党支持者と共和党支持者の見解の相違が拡大したことを指摘しているが、⁴⁸⁾

そもそもなぜ「新しい争点」といわれる人工中絶問題や、環境・エネルギー問題、あるいは外交問題ではなく、「人種」だったのだろうか。

その理由は、六〇年代以降の黒人の政治参加の増大が、白人労働者階級の間には黒人に対する激しい競争意識・身分意識・人種意識を引き起こしたことにある。アメリカの白人労働者階級の多くは、その下位に黒人が存在していたことによって、ある程度の社会的安定を確保し、さらに下層階級としての劣等感は黒人に対する優越感に置換し得てきた階層であった。⁴⁹しかし黒人運動の進展の結果、黒人は白人労働者にとって経済的競争者となった。つまり、黒人の就職は白人の職場を脅かし、住宅とよりよい教育を求めて都市に押し寄せる黒人は、郊外へ移転する経済力のない白人にとって脅威となったのである。そして、かかる人種的分極化は、単に黒人人口の集中する地帯での局地的現象にとどまらず、全国大の政治現象として現れたのであり、同じ階級内における激しい人種意識は画一的な「豊かさ」と価値観の変容」を阻む壁となったのであった。ただし現実には、戦後三〇年の間に中産階級化して郊外での生活を手に入れた黒人がある一方で、戦後から半世紀を経た現在でも、低所得者層の黒人の収入は低所得者層の白人の半分である。⁵⁰そうした都市中

心部の黒人貧困層にとって主たる関心は、生活の「質」どころか、いまもって「生存」のための雇用であり、収入であり、犯罪や強奪から自己を守る「安全」の確保である。

さらに、「脱産業社会」における「下からの改革」としての公民権運動は、国民すべての「平等」という権利が国家によって保障されたという点で「成功」であり、肌の色による様々な政治・社会的差別を受けてきた黒人たちにとっては、「革命」ともいえる変化であったことは否めない。そしてそれは、「平等」という争点の下に結集した民衆がエリート指導的な政策形成過程に対して発言し、参加し、特定の政策の変革に効果を与えられるゲットーの生活環境は劣悪で、しかもそうした階層は隔離され、固定化の傾向にある。そして居住者のほとんどは黒人である。こうした現実を見ると、市民的権利の追求に命を捧げた人々が描いた社会が実現されているとはとてもいえない。「エリート挑戦的」な運動を受けて国家が人種的な権利の拡充を行うということだけでは、市民運動による改革の真の達成は不可能であった。

ここに、「人種」をめぐるアメリカ政治社会の実相が見られるとともに、現実の「エリート指導型」政治空間の反応が重要

な意味をもってくる。すなわち、ある運動の目的が倫理的手段を用いての差別批判から、政治的手段を駆使しての差別的制度的撤廃へと転換^{⑤1}していったとき、政府が行う資源配分策が必要となるのであり、誰がそのコストを受け入れるのかという問題をめぐって、あらたな集団間関係の緊張が惹起されるのである。そして、まさにこうした緊張関係を選挙での多数派連合の形成に利用し、政党政治の空間を再形成していったのが、八〇年代以降の共和党保守に他ならなかった。

二) 人種平等と反動がもたらした政党政治空間

前述の通り、六四年の選挙以降、有権者の政党支持と人種政策に対する見解の相違が拡大し始め、それに伴って両党のイデオロギーも変化した。しかし、六八年選挙で勝利した共和党のニクソンが、ジョンソンの遺産であるアフアーマティヴ・アクションを実際に発展させたことからわかるように、国民は民主党が主導した改革の内容そのものには満足していた。八〇年の大統領選挙における地すべりの勝利によって、保守主義時代の台頭を牽引したレーガンも、六八年と七六年に共和党の大統領選挙に立候補したものの予備選であえなく敗退している。つまり六四年以後、新たな保守政策にむけた有権者の基盤が固ま

るのは、ようやくレーガンが勝利を収めた八〇年のことなのである。

たしかに、民主党が六〇年以降、社会的差別を受けてきたマイノリティの権利保護の立場に立ち、実際に政府権力によって彼らの権利を確立してきたのに対し、共和党は公民権関連の予算と政府職員を大幅に制限するなど、差別は正に実質的に反対してきた。しかし、八〇年代以降の共和党の戦略において注意すべきは、共和党保守といえどもいったん確立された国民の権利を取り上げようとはしなかった点である。^{⑤2}むしろ彼らが行ったのは、アフアーマティヴ・アクションで自分たちの権利が無視されていると感じている白人中産労働者階級の「権利擁護」という原理原則に立つことで、保守的な平等主義という政治哲学を確立することであった。ここに、ニューディール以降「持てるもの(経済的特権者)の党」と見られていた共和党は、「本物の」平等主義に拠って立つ党として生まれ変わった。つまり、レーガンが訴えたのは、巨大化した政府のもと不当な経済的負担を強いられている勤労階級のために直ちに改革を行うことだったのであり、彼は、労働し富を生み出す「自律的」個人はアメリカにおいて賛美されるという伝統的な人民理念を呼び起こし、福祉国家がいかに人民の生活を傷つけているかを説いた

のである。⁽⁵³⁾そしてレーガンを支持したのは、かつて民主党を堅固に下支えしていた労働者階級と、五〇年代の好況時代をピークに中産階級化し、政府の「受益者」というよりも「税金負担者」としての意識を強く持つようになった人々だった。

さらに、ジャーナリストのエドソールによれば、保守勢力の組織化とリベラリズムの後退の分水嶺となったのは八四年であり、それは「記号化された政治言語」に新しい意味が与えられたからであるとされる。保守勢力は、予備選の段階で民主党候補のモンデールが「特殊利益団体」(労働組合、黒人、ヒスパニック、フェミニスト、同性愛者、エイズ患者などを含むマイノリティ)からの援助を受けていたことが明らかになるやいなや、個人ではなく「集団(group)」の利益の体現者としてのイメージを民主党に貼りつけて先手をとった。そして、これにより「リベラリズム」と「保守主義」の主たる意味が塗り替えられただけでなく、両党に対する国民全般の意識も大きく変化した。⁽⁵⁴⁾すなわち、公平な課税を実現し、中産階級の住宅と収入を手に入る機会を与え、公正な報酬を得るための交渉権を保証するという意味で民主党が唱えた「公正さ(fairness)」は、多くの有権者にとって、「少数民族出身者、労働組合、フェミニスト、刑事被告人、長期失業者……」などが有利になるように、競技場

をわざと傾ける連邦政府の措置」を意味するようになっていったのである。⁽⁵⁵⁾

したがって、六四年の大統領選挙と八〇年代前半の大統領選挙における二つの「リベラル」対「保守」の構図の間には、決定的な相違が存在する。すなわち前者では、人種平等とその制度化を推し進めようとするリベラルと、人種平等そのものに反対する保守勢力との対立が明確であったのに対し、後者では、保守勢力が「人種」問題を政府権力の抑制や税金・権利の問題と結びつけ、人種的表現を用いることなく、勤労する市民に手を差し伸べるというレトリックを用いて平等主義をアピールしたのである。かかる保守的な平等主義は、「平等」という原則を基本とする点で自由主義者と変わらないが、個人や集団の権利保護を強調するのみで体制の構造的な改革にはほとんど関心を払わず、概してコストの伴わない主張であった。そしてエドソールによれば、こうした保守的な政治空間の形成と時を同じくして、「恵まれない人々のために一般市民が適度な犠牲を引き受ける意欲、つまりリベラリズムの実施に欠かせない寛容性が、徐々に失われていった」とされる。⁽⁵⁶⁾

このように、レーガンの下に大挙して有権者が押し寄せるといふ事実は、現代アメリカにおける保守主義全盛期を示唆した

だけでなく、社会問題を公的な問題として認識し、議論する領域の縮小傾向をも意味した。そして、他者に対する寛容性を失っていく社会と共和党保守のイデオロギーは、「個人主義」と「平等主義」というアメリカの伝統的政治文化に根ざしながら、共に手を携えて政党政治空間を作り上げていった。かくして、個人主義や平等主義を自己実現の手段としてのみとらえる「ばらばらの個人」は、八〇年代以降の「人種」をめぐる政党政治空間の中ですます「他者」から切り離されていったのである。

第二章 八〇年代政党政治における「人種政治」の限界

第一節 ジェシー・ジャクソンの選挙戦略と「失敗」

一) ジャクソンのとった戦略とは

八〇年代以降の保守政治と、それがもたらした政治社会の狭隘化の中から、いったん権利を獲得したはずのマイノリティ側による、より公正な利益の反映や、社会的不平等の是正を求める運動がでてくるのは、当然のことであった。実際、政党政治におけるリベリズムの衰退を決定付けた八四年の民主党予備

選は、黒人であるジェシー・ジャクソンが大方の予想を上回る票を得て一躍注目を浴びた選挙でもあったのである。本章では、オバマに先立って全国政治で注目されたジェシー・ジャクソンの戦略とアピールの限界を整理することによって、オバマが直面した戦略上の問題と可能性を論じることとする。

ジャクソンがとった戦略とは、「レインボー・コアリション (Rainbow Coalition)」という旗印のもと、文字通り多人種・多民族からなる支持基盤の形成であった。しかしながら、結局のところ、彼のいう「レインボー・コアリション」は実現に至らなかった。彼は八四年の民主党予備選で三一五万の票を得たものの、そのうち二三〇万票は黒人票(黒人票の七七%)であり、白人から獲得した票は最高でも九%(カリフォルニア州)、最低では一%(アラバマ州とジョージア州)に過ぎなかったのである。⁵⁶投票結果にこのような人種的な偏りをもたらしたのは、何よりもジャクソンの人種主義的イデオロギーであった。彼は南部出身のバプティスト教会牧師であったが、公民権活動家でもあり、七〇年代にかけて勃興した「ブラック・ナショナルリズム」の担い手でもあった。白人を攻撃するその激しさは、南部の白人人種主義者であるジョージ・ウォレスを想起させるほどであったという。⁵⁹

そこで、選挙戦略とイデオロギーの摺り合わせの必要性を認識したジャクソンは、一九八八年の予備選では、白人批判を避け、四年前に自ら支持を与えていたナシヨナリスト、ルイス・ファラカンから一転して距離をとり、白人有権者にアピールするために時にはファラカンを非難することも辞さなくなる。そしてその結果、白人票と得票数を前回よりも伸ばし、黒人の政治的取引能力を高めることに成功した。しかしながら、ハックフェルトらによれば、八八年の予備選におけるジャクソンの支持基盤の拡大を民主党内の人種階級利害の統一の結果と見ることは、依然としてできない。実際、ジャクソンのアピール戦略が、レーガノミクスを批判し、ポピュリズム的アピールによってマインオリティと白人の低所得者層の取り込みを目指していたにもかかわらず、彼を支持したのは主に黒人とリベラルな中産階級の白人であった。つまり、八八年選挙におけるジャクソンは、人種ラインに沿った票の掘り起こしが、階級ラインに沿った票の掘り起こしと両立しないことを示しただけなのである。⁶⁰⁾

さらに、ジャクソンは当初、既存の政党競争から距離を置き、民主党からの「独立派戦略」をとった。ブラック・ナシヨナリズムは黒人の意識革命を促すだけではなく、その求心力を政治的な勢力として有効化することを目指していた。黒人は、公民

権法の成立を阻止すべく議会を拠点に大統領に抵抗した南部民主党の存在に無自覚なままに民主党に投票し続けるのではなく、投票の意味により自覚的になる必要があるとの前提のもと、民主党から距離を保つことで二大政党に対してキャスティングボートを握り、政府の政策を変更していく戦略をとったのである。なお、こうした戦略の背景には、黒人政治家の増大につれて、黒人「政治家」が存在感を増していったという事情がある。

七〇年代以降、黒人社会のスポークスマンとして選挙によって正統性を付与された黒人政治家は、伝統的なプロテスト型リーダー（牧師や教師）にとって代わっていった。黒人は、黒人政治家を介して自己利益を実現する道を抵抗運動以外に見出したのであり、八〇年には黒人の大多数が「プロテストによる変革」ではなく「政治による変革」を選択したのである。⁶¹⁾しかし、黒人政治家は権力内部に食い込めば食い込むほど、「黒人の論理」から「政治の論理」ないしは「政党の論理」に従って行動せざるを得なくなり、「黒人らしさ」（アイデンティティ）を失っていった。⁶²⁾上記のブラック・ナシヨナリズムは、こうした黒人社会のリーダーシップに対する反動としてあらわれたものであり、ジャクソンもまた、かかる人種主義と政治的戦略の流れを汲んだ政治家に他ならない。しかし、結局のところそのジャク

ソンでさえも独立派戦略を放棄し、民主党寄りに路線を戻していかざるを得なかった。なぜなら、八〇年代には黒人の中産階級化も一定程度進み、人種差別も以前に比べて改善したと考える黒人が多かったため、黒人票の獲得という観点からは、民主党の存在はやはり無視できなかったからである。

実際には、ジャクソンが最も代弁しようとしていたのは都市の貧困地区に住む黒人たちであり、彼らの救済のために「政府が何をすべきか」が彼にとつての最大の問題であった。ゲッターに取り残された黒人に対してなされるべき政策を政府に働きかけることこそが彼の目標であり、それは公民権運動の成果が不完全であることを体現する人々の要求を汲んだものだったのである。一九八四年の党大会にジャクソンの代表団に同行したバーカーは、ジャクソンの選挙戦は、キング牧師と公民権運動の夢と目的を実現するとの頑強な決意のもと、内政・外政問題を含めた広範なイシューを盛り込み、あらゆる人々を連合内に引き入れることによって公民権運動を超えようとする挑戦だったと振り返る⁽⁶⁴⁾。しかるに、その「挑戦」は、八〇年代の黒人社会の変容と民主党内におけるリーダーシップの変化の中で挫折を余儀なくされた。少なくとも、人種を超えた包括的選挙基盤の形成には至らなかったという意味で、「失敗」に終わったと

いわざるを得ないのである。

では、ジャクソンの場合、特定の人種へのコミットメントと階級意識を梃子にした広範な支持基盤の獲得という、一見して両立が困難な二つの挑戦は、どのような言葉をもってアメリカ国民に訴えられたのだろうか。一九八四年、サンフランシスコで行われた民主党党大会でジャクソンは基調演説の舞台に立ち、オバマと同様に「希望」という言葉を用いたが、この時、アピールとしての「希望」は八〇年代のアメリカ政治社会に対し、どのような意味をもったのだろうか。

二) ジャクソンの「希望」は誰に向けられていたのか

一九八四年七月一八日、ジャクソンが演説のタイトルとしたのは、「虹の連合」(The Rainbow Coalition)であった。冒頭からしばらく、彼のメッセージの核心は、貧困にあえぎ、教育を受けられない人々の救済が民主党の使命(our mission)⁽⁶⁵⁾であり、「変化」のために必要なのはリーダーシップとイニシアティヴである、ということだった。「リーダーシップこそが、我々自身の中にある危機からの脱出を導いてくれるのです。……この選挙戦を通して、私は民主党と、そしてアメリカに対するリーダーシップをとろうと努めてきました。……それが光を注ぎ、

傷を癒し、そして再び希望に火をつけるなら……それは善いことであり、私にとって最も重要なことなのです。

前述のとおり、ジャクソンは黒人有権者の民主党支持と黒人政治家の政治権力への参入を認めざるを得なかったため、独立派戦略を棄て、黒人勢力を利用した民主党の党内改革を試みた。なによりも黒人の民主党支持率は、一九六四年の大統領選挙以来一貫して八〇%前後と高かったのである。しかし実際には、ジャクソンに投票した有権者の五三%はジャクソン候補を無所属候補とみなしていた。⁶⁶つまり、ジャクソンに対する支持率は、必ずしもそのまま民主党に対する満足度を意味してはいなかったのである。⁶⁷そうした状況を踏まえながらジャクソンが語る「リーダーシップ」とは、広く民主党のそれよりも、むしろ党内黒人勢力のリーダーシップであり、彼らの党内インシアティヴによる現状の「変化」こそが企図されていたと考えるべきであろう。かかる党内改革の企図は、レーガニズムやレーガノミクスへの不満と反発を梃子にしたアピールという形をとった。基調演説においてジャクソンは、レーガン政権による大きな代償、その負債の大きさを激しく批判した。「レーガンによる減税の受益者は大企業と富裕層のみでしょう。……この政権は、貧困層の生活をより一層不幸にするだけで、労働者階

級に対するプログラムはどれも不平等なものです。……我々は何もせずばんやりとしているわけにはいかない。今こそ、変化のために闘うべきなのです」。そして、このように民主党と強い絆で結ばれている公民権活動家と黒人政治家の連合勢力主導のリーダーシップに対する「プロテストの意味」⁶⁸を込めて出馬した八四年のジャクソンは、民主党の勝利の条件として、「希望」という言葉を以下のような文脈に据えた。「民主党は勝利できるのです。」⁶⁹とはいえ我々は、人々を闘いへと鼓舞するような、希望を示さねばなりません。我々の抱えているジレンマから脱出し、(進むべき)道へと導くためのプランを」。オバマの「希望」がより抽象的な、アメリカ史とそれを共有するアメリカ市民すべてが抱きうる「理念」の下にあり、個人がより大きな社会的コンテクストの中に自己と他者を関係付けるといふ公共道徳のイメージであったのに対し、ジャクソンの「希望」は黒人が正当な資源を勝ち取るための具体的な手段(プラン)と等置されていたのである。よって、ジャクソンが壇上で言及した「希望」には、V.R.A (Voting Rights Act: 投票権法)やE.R.A (Equal Rights Amendment: 男女平等憲法修正条項)⁷⁰といった既存の制度の厳格な実施要求が含まれることになった。彼にとっての「希望」は、「生存と進歩のための武器」(weapons of

survival and progress)」であり、黒人を中心とした公正な配分に与れない人々に向けられていたのである。実際、黒人政治家は投票率の高い黒人ミドルクラスの票に主として依存しているため、黒人ミドルクラスないしは高学歴者向けの政策を支持してきた。しかしこれらの政策は黒人の貧困層やアンダークラスの救済にはほとんど役に立たず、むしろ黒人社会の崩壊を促す一因となっていた。⁽²⁰⁾そこでジャクソンは自らの人種主義的イデオロギーに忠実に、先の引用部分に続けて「黒人票」が「変化」のためにいかに重要であるかを力説する。「多くの黒人票は何を意味するのか？私かなぜそのために闘うのか？……あなた方がそこで彼らとともにいない限り、困窮する同胞を支えることはできないのです」。

しかし、主に都市に残された黒人貧困層という社会問題の改善を目標に据え、差別的「被害者」たちに対する権利拡充を鼓舞する手段として唱えられる「希望」は、それ自体限定的な意味しか持たなかった。特に共和党の戦略によって民主党が「特殊利益の党」というイメージが固定され始めた八〇年代においては、ジャクソンの「希望」は現実の政党政治構造に対する戦闘的な「プロテスト」の源ではあり得ても、多数の白人有権者の心にも訴えかけるような「希望」ではあり得なかったのである。

第二節 「人種政治」の限界

——「共通の基盤 (common ground)」を求めて

演説が始まって一〇分を過ぎた頃、ジャクソンのこの言葉で会場の興奮は頂点に達した。「アメリカ国旗の色は、赤、白、そして青から成っている。しかし、アメリカという国は、虹色 (rainbow) なのです。……赤、黄色、茶色、黒、そして白色づけされています。……そしてすべて我々は、神のもので、価値のある (precious) 国民なのです」。⁽²¹⁾ここで強調されるのは、虹色に象徴されるアメリカの多様性であった。彼はアメリカを、「キルト (American Quilt)」と表現した。色やサイズ、布の織り方はすべて異なっているとしても、共通の糸で縫い合わされ、美しく織られるキルトは、「白人、ヒスパニック、黒人、アラブ人、ユダヤ人、女性、ネイティブ・アメリカン、小規模農場経営者、ビジネスパーソン、環境保護運動家、平和運動家、若者、高齢者、レズビアンやゲイ、障害者によってつくられる」のである。しかし皮肉にも、エドソールによれば、ジャクソンのこのメッセージは、「民主党とリベラリズムに関する一般国民の認識の変化をさらに促進させた」という。つまり、六〇年代以降、有

権者の大半が民主党に対する見方を変えていた中で、ジャクソンはレーガンが攻撃的にした「グループが支配するアメリカ」というリベラル派のビジョンをあらためて表現したのであり、よってジャクソンがレーガン批判によっていかに階級意識に訴えようとしても、それは白人中下層にとつては、「マイノリティの権利」を制度化し、自分たちの利益を脅かす「敵」を想起させる以上のものとはなり得なかったのである。二〇年間にわたる人種問題をめぐる文化や体制の激変に打ちのめされてきたと感じていた白人有権者たちは、「マイノリティをひいきする」民主党の「公正さ」よりも、共和党の「平等主義」により一層引き付けられていくことになったのである。

しかし前述のように、ジャクソンは、一九八八年の予備選では、それまでの人種主義的なイデオロギーを抑制し、ナショナルストたちと距離をとることで白人票を伸ばすことに成功している。八八年の党大会演説では、彼はこう述べた。「誤った独立の意識を選べば、我々の船は衝突し、乗員を失うでしょう。……しかし、より大きな善、共通の善のために行動する能力に拠れば、舵取りに誤ることはないのです」⁽²⁷⁾。たしかにここには、八四年のアピールを拡大したより包括的なビジョンが認められる。つまり、ここでジャクソンは、「正当な資源配分」という

技術的な訴えから、「我々の国家の『善』は危機に瀕しており」、「勤労する人々、弱者や貧者、世界中の多くの者たちが希望と尊厳を失うことがあってはならないのです」というより道徳的な訴えへと、コンテクストを拡大させたのである。彼は、「相互の生存状態においてのみ、進歩は可能なです」といい、ライオンと子羊にも外的環境から自己を守る共通の生存本能があるように、我々人間にも「共通の基盤 (common ground)」が見出せるはずだという。しかしながら、結局のところ「希望」は六〇年のケネディの勝利、キング牧師、そして六四年のジョンソンの勝利とそれがもたらしたもののという文脈におかれた。そして、レーガノミクスや核開発へと進む船の舵取り役を替えるためにはやはり「リーダーシップ」が必要と唱えられたのであった。⁽²⁸⁾

ジャクソンが代弁しようとしていた都市の貧困層が、公民権運動が未完であることを衝撃的に体現する人々であった以上、彼が「リーダーシップ」という言葉によって政府の重要性を強調したのは、ある意味で正当なことではあった。第一章で言及したように、人種平等という正義の追及が政府による制度の拡充へと転換していったとき、「政府が何をすべきか」という問題こそが重要であったからである。しかし実際には、六〇―七

○年代にかけては黒人ばかりでなく、他のアメリカ人も同様に政府に深く依存していたのであり、こうした文脈でむしろ重要性を備えるのは、ベラーが指摘するように、資源配分をいかなる基準体系のもとで行うかということの方である。「政府が何をすべきか」というコンテキストでは、たとえば政府の政策立案者は、主に老人向けの新たな医療技術と、貧しい女性に対する出産前の保険とで、どちらに資金を充当するのが道理的なここかと問い始める。つまり、医療と政策どうしの間でも、こうしたトレードオフをめぐる問いが発せられることになるのである。⁽⁷⁴⁾

そしてかかる状況に関して、ベラーは「我々にとって必要なのは、こうした問題についての公共的な討論に資するような、いっそう豊かな道徳的言説なのだ」⁽⁷⁵⁾という。彼によれば、ジャクソンも、他のリベラルな指導者たちも、「政府に突きつけられた目標の達成には全力を傾注するが、人間関係の構造、市民精神の涵養の可能性を含む制度的形態には、それほど配慮していない」⁽⁷⁶⁾のである。

このように、ジャクソンの多数派連合形成の試み、あるいは「共通の基盤」の模索が、政策間のトレードオフを解消する際に必要とされる「道徳的言説」を欠いていたことを念頭におくとき、はじめてオバマのその特色が明らかになる。オバマは、

公民権運動の「成功」と民主党のリーダーシップを唯一の希望の源泉とは認識していない。彼がより大きな問題とみなすのは、公民権運動の勝利と多くの社会変革をもたらしたりリベリズムが、そのプロセスにおいて「共有された前提 (shared assumption) を欠いたままであったこと」⁽⁷⁷⁾である。そして彼の言葉によれば、その前提とは、アメリカ人としての一体感をもたらし得るような「信頼性と連帯の意識 (quality of trust and fellow feeling)」⁽⁷⁸⁾である。要するにオバマにとって、「制度」は、もはや社会の網の目に浸透し、個人の社会規範そのものを変えていける唯一の手段ではないのである。「いかにして現実の分裂を克服し、共通の善を導き出すか」という問題を解決する際の突破口は、少なくともも政党や特定の集団のリーダーシップのみによっては発見されない。むしろ、すべてのアメリカ人がこれまで見落とされてきた「前提」を認識することこそ、「希望」の源泉なのである。言い換えれば、リベリズムの真の復権は、党派を超えた善意のアメリカ人による多数派連合によってはじめて可能となるのである。そしてオバマは、政治的リーダーが新しいアイデアに開かれさえすれば、そうしたコンセンサスに通じる精神と思考の転換は十分に可能であると考えている。⁽⁷⁹⁾

こうしたオバマの主張は、単に「ポスト人種主義」の象徴で

あると見ることもできよう。たしかに彼の理念は、人種主義的運動が掲げた「政府が何をすべきか」というアピールではなく、すべてのアメリカ人に対して「どのような政府を望むのか」という政治的思考の転換の必要性を強調しているのであり、ここに彼が「二大政党の分裂の修復と人種の緊張の緩和」を期待される理由もあるのである。しかし、実はその理念は、オバマ自身が培ってきた公的精神と人種の葛藤の経験を考察したとき、はじめて「ポスト人種主義」を超えた政党政治空間の転換可能性を明確に示唆することになる。

第三章 政党政治空間の転換可能性

第二節 オバマにおける公的活動の内面化

——「記憶の共同体」への道筋

オバマは一九八三年にコロンビア大学を卒業しているが、その後ハーヴァード・ロースクールに入学するまでの三年間（一九八五年～一九八八年）、シカゴのサウスサイドでコミュニティ・オーガナイザー（地域活動家）の仕事に従事していた。彼は、現在でもしばしばこの三年間の経験に触れ、そこで「市

民が自発的に、協力して団結する力、それによってもたらされる意味のある変化⁽⁸⁴⁾」を学び、「ネイバーフッドは、私が受けた教育の中で、最も優れた教育だ⁽⁸⁵⁾」と断言する。では、彼は何を「学んだ」のか。

オバマは大学卒業後、短期間フィナンシャル・コンサルタントの仕事をした後、ニューヨークの消費者組織で働き、公立図書館でシカゴのオーガナイザーの募集欄を目にする⁽⁸⁶⁾。八〇年代のレーガン政権下で政治を志す学生や若者が概してそうであったように、オバマもまた、何かに駆り立てられていた。そのころから彼は、「トップ」を変えることは真の「変化」を意味しないと考え、変化は「結集されたグラスルーツから起こる⁽⁸⁷⁾」との信念を抱いていた。彼がぼろぼろのホンダ車で降り立った一九八五年のシカゴは、初の黒人市長、ハロルド・ワシントンと、白人市会議員との間の人種闘争に揺れ、激しい人種的分裂の下にあった。最初に立ち寄ったハイドパークの床屋で、彼はワシントンの勝利が、シカゴの黒人にとっていかに大きなものであったかを知る⁽⁸⁸⁾。黒人の主人は言った。「ハロルド以前、俺たちは二級市民だったんだ⁽⁸⁹⁾」。

彼の主たる活動は、サウスサイドに地域雇用促進センターを設立すべく、黒人教会をベースとした人々の組織化を図ること

にあった。オバマを含めたオーガナイザーたちは、まず郊外の二〇の教会の参加を取り付け、Calumet Community Religious Conference (CCRC) を設立した。その後、CCRCは八つの教会を含めたプロジェクト、Developing Community Project (DCP) となった。⁽⁸⁶⁾ オーガナイザーの主な役割は、集団を形成し、そのアジェンダを設定することではなく、権力から疎外された貧困地区の人々や職を失った人々のコミュニティに入り込み、彼らのアイデンティティや行動規範を調査したうえで、共通の基盤を見出し、彼らが問題を共有できる「場」を作り出すことだった。したがって、オバマに最初に与えられた仕事は、一週間に二〇―三〇人のコミュニティ・メンバーに対するインタビューを行うことであった。⁽⁸⁷⁾ 政治の世界では「ブラック・ナショナルリズム」の継承者たるジェシー・ジャクソンが多くの黒人の支持を集めていたが、第二章で言及したように、ジャクソンの登場の背景には、都市の黒人コミュニティにおける継続的荒廃、貧困の連鎖があった。オバマはまさに、そうした当時の黒人コミュニティのただなかに飛び込んだのであり、「黒人」につきまとう「傷」と憎しみ、自尊心の喪失からいかにして闘う強さを導き出すかに腐心していた。そしてその中で、同時に、彼は自分の「相続したもの」を深く考えることになる。

彼の父は、結婚後、奨学金を得て、単身ハーヴァード大学へ向かった。家族を連れ、共に暮らせるほどの資金はなかった。父はそこで博士号を取得し、再びケニアへと戻るのであった。その間、母は父と離婚し、ハワイ大学の同僚であったインドネシア人と再婚する。したがってオバマも、幼少期をインドネシアで過ごしている。

しかし、オバマにはなぜ父がケニアに戻ったのかを理解できないでいた。彼は父との記憶をほとんど持っていないかったが、父の事故死を契機にシカゴで義妹と再会し、父の人生の軌跡を知ることになる。アメリカから戻った父は、石油会社に勤めたのち、ケニアの観光省に入るが、一九六七年までにケニアの部族闘争は悪化し、政府は崩壊の危機に陥った。周囲が沈黙を守る中で彼は反部族主義を唱え、ついに政府から追放される。生活は窮乏し、父の心は荒廃し、閉ざされていった。しかし、部族指導者の死によって、父は再び政府に復帰した。オバマは、初めて聞く父の物語に、白人の祖父、インドネシア人の義父に抱く感情以上ものが沸くのを感じた。彼は自伝で、そのときの感情をこう表現している。「私は、私自身の中で探していた生来的属性 (attribute) のすべてを、父のイメージに包み込んだ。黒人であり、アフリカ人である父のイメージに」。⁽⁸⁸⁾ ここででは

めて、オバマは、特定の集団のコンテキストの中に自己を置くことになる。

シカゴに来る以前にオバマが全身に漲らせていた沸きあがるような改革精神のうちに含まれていたのは、属性や伝統から自由で、コスモポリタンな自己アイデンティティであった。⁽⁸⁹⁾シカゴでの「共同体」経験と新たに見出された父の「記憶」こそが、オバマの認識に決定的な転回をもたらしたといえよう。そして、かかる「記憶」と「共同体」へのコミットメントの問題を考える際に、ベラーの指摘は示唆的である。

ベラーは、独立独行を強調する個人主義は、純粹で何ものにも規定されない選択や、伝統と義務とコミットメントからの自由を自己の本質とみなす概念を生み出すと指摘した。⁽⁹⁰⁾しかし、離婚を契機に人生の優先事項を家庭へのコミットメントへと改めたブライアン・パーマーのように、一見他者とのつながりを切に願っている個人ですらも、所詮は「負荷のない(unencumbered)自己」であって、結局のところ空虚さを感じない。それは、合理性や競争の支配する個人主義的社会的制度的コンテキストにおいてのみ意味をなす自己である。逆に「負荷のある自己」は別のコンテキスト、とりわけ共同体というコンテキストのもとではじめて意味をなす。そしてベラーによれ

ば、それは「歴史」を意味するものであるが、根本的には自らの過去によって成立する。それゆえに、真の共同体とは、自らの過去によって構成された「記憶の共同体」となる。さらに、それは家族の経験に根ざしていることが多く、個人が公的な生活に導かれていく重要な道筋となる。⁽⁹¹⁾たとえば、アメリカの「功利主義的個人主義」によって成功し、「表現的個人主義」に魅せられているイタリア系の二世は、家族の中の自己の民族集団的遺産にしづぶ関わっていたにすぎなかったが、イタリア系グループへの参加という機会を得、その過程で予期せぬ偏見を経験することによって、忘れていた共同体を思い出したという。そしてそれは、彼をイタリア系以外も含めた社会全体の福祉活動へと導いた。⁽⁹²⁾独立独行、何ものにも規定されない選択や、伝統からの自由という意味での個人主義を棄てることによって、狭義・広義双方の意味での共同体の事柄に意を注ぐことができる人間、つまりベラーがいうところの「市民的個人主義」的人間へと変身を遂げたのである。

これと同様に、オバマの場合も、黒人コミュニティへの献身という公的生活を送るさなかに父親の死から始まる家族の物語を知ったことで、「記憶の共同体」は「黒人」という人種的属性に接合された。同じくベラーによれば、家族や共同体の記憶

は、必ずしも達成や成就といった模範的な話ばかりではなく、痛みや苦しみに満ちた物語をも伝えるが、しかし、その中で成長する者は、共同体が経てきた物語ばかりでなく、共同体の中で生き、その共同体を活かすような忠誠や義務といったバタンをも定めていくようになるという。そしてそれは、分離された自己との緊張を喚起することで、個人と共同体のいずれをも活き活きとした自己批判的なものたらしめる。オバマはシカゴでの三年間で、そうした葛藤から生まれる真の「グラスルーツ」の意味とその力を学び、また自身もそうした葛藤を経験することで、公的生活を内面化するに至った。基調演説で彼が言及した、アメリカで教育を受けるといふ機会を手にしたケニアからの移民としての父親は、身分や民族から自由であり、独立した個人には機会が開かれているというアメリカの個人主義の一面を体現していると同時に、演説に貫通させたもう一つの個人主義、すなわち共同体と連帯を基礎とした市民的個人主義にも通じていたのである。

その後、オバマは、オーガナイザーとしての経験を積むにしたがって、ネイバーフッドの組織化がもたらす変化の意義と同時に、その限界にも直面した。サウスサイドのアスベスト除去をめぐる住宅問題に関しては、彼は根本的な改善にたどり着け

なかったのである。⁽⁹³⁾ 彼は、オーガナイザーとして働けば働くほど、直面する最も重要な問題がローカル・レベルでの解決によつては不可能であると自覚していった。⁽⁹⁴⁾ 彼の心はその時から、ワシントンに向いていく。

第二節 「一つの国民 (one nation)」と現実としての「人種」

アメリカを構成する「個人」を「(一つの) 共同体」という大きな社会的コンテクストのうちに据え、他者配慮と連帯の意識を喚起するというアピールは、彼自身に内面化された上ではじめて可能となった。それでは八〇年代以降、保守主義者たちが作り上げてきた政治空間において問題となっている現実の不平等に対し、彼はどのような具体的態度で臨もうとしているのだろうか。彼の基調演説が訴える「一体性」と「人種」の関係を、ここで明らかにしなければならない。

オバマの演説の中で聴衆がひとときわ沸いたのは、次のフレーズが発せられた瞬間だった。「リベラルのアメリカも、保守のアメリカもない……黒人のアメリカも、白人のアメリカも、ラティーノ、アジア系のアメリカも。あるのは一つ、(我々の)

アメリカ合衆国 (the United States of America) なのです」。
 専門家や学者は、アメリカをレッド・ステーツ (共和党優位州) とブルー・ステーツ (民主党優位州) を (賭け事のように) 分ける (slice-and-dice) のを好むが、ブルー・ステーツにも宗教心に満ちたものはいるし、レッド・ステーツにも政府に不信感を持つものはいる。イラク戦争に反対する人々も賛成する人々も、根本はどちらも愛国者ではないか。オバマは力を込めた。「多から一を (E Pluribus unum)」。「我々は一つの国民 (one people) なのです」。

オバマの演説のインパクトは、メディアによって様々に伝えられた。特に、多様な人種や民族から成るアメリカではなく、「合衆国 (The United States)」の下での「一つの国民 (one people)」を強調した上記のフレーズに関しては、彼を現代アメリカにおける「ポスト人種政治」や「カラーブラインドな社会」の体现者とみなすことはたやすくなされた。しかし、本稿における今までの議論に鑑みれば、そうした解釈は従来の政党政治が生み出したきた枠組みの中で生まれるものであり、人々の「視野を拡げる」という彼の政治アピールを不当に限定的なものにしてしまうおそれがある。当然ながらオバマ自身も、かかる解釈に少なからず違和感を持っている。⁽⁹⁵⁾ 彼ははっきりと述べている。

「一つの国民」は、もはや「人種」間の平等が、アメリカ社会において達成されるべき問題ではないことを示しているのではない。実際の社会において、人種間の政治的・社会的な平等は明らかである。⁽⁹⁶⁾ したがって、人種的態度がそうした不均衡に関係がないと主張することは、アメリカの歴史と経験から目をそらしているだけにすぎない。⁽⁹⁷⁾ 特に黒人に関しては、雇用や教育、住宅等の基礎的領域において未だ差別的状況におかれていることは疑うべくもなく、その意味で「公民権運動は未完成であり、その完成に着手しなければならない」。⁽⁹⁸⁾ 彼は、少なくとも雇用や住宅、教育における不均衡に対する法的正しさは必要と考えている。

彼の人種観において一貫しているのは、以下の二点である。

第一に、従来のコストとベネフィット、という基準体系は単にアメリカ人を「我々」と「彼ら」に分断し、決してアメリカを転換するような広範な政治基盤の確立に寄与しない、という認識であり、⁽⁹⁹⁾ 第二に、都市ゲットーの黒人コミュニティの問題の根底に、保守主義者が利用した「福祉を受けるに」値する (deserving) 貧困者と「値しない (undeserving) 貧困者」という区別を見る、という点である。⁽¹⁰⁰⁾ そのような区別は、「保守主義の台頭の過程で塗り替えられた「リベラル」のイメージと

同様に、都市貧困層を犯罪や暴力といった社会の病理としてイメージさせるものである。メディアや保守主義者によって示されるインナーシティの犯罪率やシングル・マザーの増大は、彼らを社会の中で「勤労する市民（福祉受給に値する市民）」としてではなく、「（福祉受給を受ける）資格を持たない市民」として見る見方を植えた。そして、こうしたイメージが定着した状況のもとでは、「リベラルな政策、あるいは公民権運動の指導者たちの応答は、助けにならない」⁽¹⁰⁾。人種主義の被害者への非難をいかに避けようとしても、「リベラルな政策」は、黒人たちが貧困状況に陥っていく過程で根深い「人種主義」に直面し、それが逆に彼らの行動パターンや思考パターンを規定してしまう点を看過することになる。オバマによれば、シカゴで育った黒人たちが「大移動」とゲットーの生成⁽¹¹⁾、そして住宅の制限契約と公共住宅への押し込めという歴史を知っているように、貧困は累積的な文化であって決して生来的なものではない⁽¹²⁾。ところが、そうした都市の荒廃から離れたところで生を営んでいたリベラルな政策立案者もまた、彼らを「被害者（victims）」とみなし、機会を与えるべき存在とみなす点において、保守主義者と軌を一にしている。オバマによれば、むしろ政府が行うべき対策は、たとえば新鮮な食品を売るスーパーマーケットの

促進によってインナーシティの食習慣を転換すること、あるいはネイバーフッドや家庭や教会によるコミュニティベースの規範教育の実施なのであり、⁽¹³⁾「被害者」の救済ではないのである。オバマのこうした認識は、一見たところ「ポスト人種政治」的であつても、その本質において、現在のアメリカに見られる価値体系そのものの転換を強く意識していることは、誰の眼にも明らかであろう。彼は、「一つの国民」という視点が不可避免的に孕む不平等の隠蔽の可能性を払いつつ、国家を構成しているのは「切り離された個人」ではなく、「連帯する個人」であると信じている。そうした信念を支えているのは、「ポスト人種主義」というよりもむしろ、「ポスト没個人主義」の理想である、といえまいか。

第三節 現代アメリカ社会の「見えない他者」 ——「連帯の理念」の現実化は可能か

ベラーの研究に登場した、優先順位の変換をマクロな社会的価値体系に依拠せずに行う「典型的アメリカ人」ブライアン・パーマーは、彼の居住するカリフォルニアの郊外について、こう語っている。「どうしてカリフォルニアはこんなに住みやす

いのか。……この住人は、誰かに他人の価値体系に踏み込まれでもしない限り、まずもって他人の価値体系のことなど気にしないで暮らしてゆけます。ここで皆が心得ている大雑把なルールは、こうです。金と好きな人を手に入れたのなら何をやっても結構。ただしよその誰かの財産に傷をつけたり、安眠妨害をしたり、人のプライバシーに鼻を突っ込んだりはしないこと⁽¹⁰⁾。

ブライアンにとって、コミュニティ内における「他者」との関係は「個人が決めたライフスタイルの追求に（互いに）干渉しないこと」によって成り立つ。よって彼が隣人と共通の利害を持ち、ある意味で彼らの人生において相互依存しているかもしれないことは、その認識空間の外にある。そこでペラーは、この「ライフスタイル」という言葉を「共同体」という言葉よりも限定的で断片化された意味を持つものととらえ、両者を明確に区別する。すなわち、共同体が「公共的な生活と私的な生活の間の、またあらゆる種類のコーリング（人々の活動と性格に具体的理想を与え、その人の生活の道徳的意味から切り離せないものとしての「仕事」の間の相互依存関係を良しとしつつ、包括的な全体であろうとする」のに対し、ライフスタイルは根本的に断片的で、類似したものの同士のナルシシズムを良しとするのであり、したがって「ライフスタイルの共同体」はむしろ、

「ライフスタイルの飛び地 (lifestyle enclave)」とでも表現されるべきものである。この「飛び地」は、特に余暇と休暇をめぐる私的生活にしか関わらないという点で個人の一部しか含まず、ライフスタイルを共有するものしか含まないという点で社会的にも断片的である⁽¹⁰⁾。

こうした「飛び地」の出現は、自律的で小規模な地域共同体というアメリカ的生活の組織形態を源とし、直接的には工業化と全国的市場の出現、すなわち「大きな社会」の出現の結果である。長い間、私的生活とその余暇および消費のパターンは社会的地位の表現であり、その社会的地位は、社会階級と結びついてきた。しかし、社会的地位や社会階級が全国的な職業システムに依存するようになると、彼らは地域の共同体から離れ、共通の歴史などもたない全く新しい郊外住宅地へと移住し始めた。ここにおけるコミュニティの基盤は、共通の歴史や記憶ではなく個人の選択であり、利害の一致である。ペラーによれば、こうしたライフスタイルの「飛び地」の内部の人間にとっては、ライフスタイルを異にする人間は「軽蔑の対象ではないが、彼らのやっていることは無意味であり、さらには目にみえ、さえない」⁽¹⁰⁾。

一方、現代における都市ゲッターをめぐる人間関係に目を

転じて、やはりそこにアメリカ社会における「他者」像の変化を見てとることができる。シカゴにおけるゲットーの生成と人種間関係を、連邦政治のダイナミクスと都市開発の文脈において分析するハーシュによれば、一九一九年に起こったシカゴの人種暴動では、二三人の黒人と一五人の白人が死亡し、五〇〇人以上が負傷した。しかし同じ「人種暴動」という表現を与えられていても、一九六八年にシカゴのウエストサイドで起こったキング牧師暗殺に伴う人種暴動は、一九年のそれとは明白に異なっていた。たしかにそれは、黒人コミュニティの「怒り」の表出ではあったものの、主な死傷者は警察官やナショナル・ガードと黒人たちとの体面対決の結果によるもので、白人シカゴ市民との衝突はほとんどみられなかったのである。ハーシュは、一九年の人種暴動が国家をも震撼させる“communal riots”（共同社会間に起こる暴動）であったのに対し、六八年のそれは、“commodity riots”（商品略奪型暴動）であったとする。⁽¹⁰⁾ハーシュによれば、六八年当時、勃発した暴動に対して人々が抱いたイメージは、多くの暴徒や死傷者の姿ではなく、暴動の中心地となったマディソン通りの商店街をおおう炎であった。⁽¹¹⁾一九四〇年代から六〇年代にかけて、黒人が大量にシカゴに流入したため、「ブラックベルト」はサウスサイドからウエスト

サイドへと拡大し、隔離されたゲットーへは、治安維持のための警察権力も及ばなくなっていたのである。そしてハーシュは、現代の都市ゲットーの形成と暴動の変化の背景に、戦後の連邦主導による都市開発と住宅政策が生み出した黒人の隔離とその更新があると指摘する。ここに見出されるのは、都市のゲットー空間に秩序を保障するシステム自体の衰退と、「貧困」に対するアメリカ市民の差別的な「イメージ」の固着、そして、「ライフスタイルの飛び地」の内部の人間には他者が「見えない」という深刻な状況である。

都市のアンダークラスの問題は、社会における貧困層をどう救い出すか、という政治的問題でもある。では、ニューディールを（ロッキの信条から離れた）プラグマティックな改革運動にした自由主義の伝統は、現代のアメリカにおける市民的条件にもとづく差別主義と貧困の連鎖、それにゲットーの孤立化という問題を前に、プラグマティックな改善策を何ら提示できないのだろうか。この点について、多文化主義の思想から生み出された合衆国のビュリタン文化を相対化しようとする動きに異を唱えるモローンがあらためて着目しているのが、アメリカ人の宗教的価値観である。ビュリタニズムの価値観においてはたしかに、怠惰・飲酒・暴力・強欲は罪⁽¹²⁾であり、こ

うした道義意識 (morality) が「他者」への恐れや排斥へとつながっている。つまりこの道義意識により、今日の都市の貧困層はイメージとしての「罪人」に置き換えられるのである。しかしモローンが重視するのは、逆にそうした道義意識の伝統が、その責任を罪人個人に帰すだけでなく、社会的なシステムの問題としてとらえ、政治経済的な改革へとつなげる精神を含んでいた点である。⁽¹²⁾ 三〇年代や六〇年代の改革政治の源は、罪の原

因を社会改革によって取り除こうとする宗教的信念であった。現代の社会構造の変容と人々の志向の変化という流れの中で、こうしたアメリカの宗教的伝統を考慮するとき、オバマのアピールは、現代アメリカに生きる人々の「リアリティ」に接近しながら、アメリカの理念をいかに現実化していくか、という試みであるといえよう。上記のモローンは、現実の差別をなくすために、過熱する社会集団間の競争に順応し、権利保護の名の下に国家の介入を増やしていく道ではなく、アメリカ人ならば誰しもが抱くアメリカニズムに訴える道を提唱している。彼は、アメリカニズムに訴えることによって、人種平等の重要性を人々の心に刻み込み、人種を超えた連帯感が醸成されていくことを期待するのである。⁽¹³⁾ 現実のアメリカ政治では、予備選

登場とその政治的信条の背景に、上記のような新しい知的潮流との連関をみると、現代アメリカに住まう人々が、選挙における勝利がもたらす変化を超えた、より基底的な政治空間の転換を期待していることと見ることもできよう。

結

一九六四年、公民権法と投票権法の成立によって、建国以来の黒人に対する不当な差別が非合法化されたまさにその年、既存の二大政党政治に「人種」という争点に沿った亀裂が生じた。ニューディール以来の「中下層階級の党」としての民主党は、ジョンソンによって「マイノリティの党」へとイメージを変え、ゴールドウォーター、そして民主党から離反したウォレスへと続く保守派は共和党を「白人の党」のイメージに変えていく先鞭をつけた。

それから二〇年後の一九八四年、黒人の政治参加は拡大し、黒人政治家の数も増加したが、その一方でインナーシティで貧困から抜け出せない黒人たちが生まれた。犯罪が増加し、中産階級は郊外へと移動することによって都市の荒廃から逃避した。アフアーマティヴ・アクションは、同じ「ニューディール

連合」の構成員であった黒人と白人中産労働者階級の間に、ますます激しい対抗的な「人種」意識を植えつけ、反税闘争などの白人の「バックラッシュ」を巻き起こした。六四年以降、二大政党対立の軸となっていた「人種」を基礎とするクリーヴイッジの下、共和党はそうした状況を税金や権利のイシューと絡めることによって民主党白人層を煽り、専ら票の「略奪」に成功してきた。他方で「マイノリティの党」となった民主党が力を入れたのは主に黒人票の「動員」であり、そのために党内に増加する黒人政治家が大きな役割を果たすようになった。しかし、アメリカ社会において着実にすすむ黒人の中流化と都市貧困層の増加という二つの現象によって生じた黒人内の階層分化を背景に、民主党内では、政治の論理の中で「黒人」政治家と黒人「政治家」の対立が起こっていた。そうした中でジャクソンは、政党政治の中に集団としての「黒人」の真の利益をインプットするために立ち上がったのだった。

さらにそれから二〇年後の二〇〇四年、リベラリズムの衰退と保守主義の浸透、「アメリカ市民」としての資格を基準とする新しい差別主義の生成と貧困の継続、それにラティーノやアジア系の増加による「アメリカの褐色化」という人口構造の変容を踏まえながら、黒人であるオバマが民主党大会の演壇か

ら訴えたのは、属性による差別への批判や政党のリーダーシップではなく、アメリカ国民が共有する理念としての「公的意識」であった。オバマの「楽観主義」の含意をさらに深く読み取るのであれば、次のように考えられる。彼は演説の中で、「楽観主義」と「盲目的楽観主義」は異なっていると述べた。多くの人々が現在陥っている他者の排除と無関心は、個人的目標の中で「独立して」生きる個人が他者や全体としての社会に目を向けず、関心を示さない状態をメルクマールとする「盲目的楽観主義」である。しかし真の「楽観主義」の支柱となる「希望」は、困難や不安におびえる時、自己の内面に閉じこもるのではなく、他者との協力に基づいて見出していく「希望」である。彼の「楽観主義」は、人々の現実世界と視覚が狭隘化していることを認識し咀嚼したうえで、あらゆる社会問題を「克服できる問題」としてアジェンダにのせようとする。つまり、彼のアピールを貫くオプティミズムは、一定の政治的現実感覚を備えたブラグマティズムに転化しうるのである。

ベラーの指摘を裏付けるかのように、⁽¹¹⁾オバマはアメリカの社会的価値体系の根底に、自己を他者とのつながりや関係性を自らの人生に「なくてはならぬ」ものと位置づける価値観の存在を認めている。現代の二大政党政治は、適切な社会関係のあり

方をめぐる規範的な議論の領域を狭めてきた。そのため、有権者はそれによって私的利益と権利がいかなる影響を受けるのかという観点からのみ公共政策を考えるようになった。それは、トクヴィルが最も恐れた「市民総無関心」の構図に他ならない。

「生まれながらに平等」な人々が、自律的で独立性を備えた理性的個人として政治社会を形成しているというアメリカが備えてきた先駆的近代性に関しては、トクヴィルやハーツ、それにベラーがつとに指摘している。オバマもまた、アメリカの提供する機会や平等と、自由主義社会だからこそ実現できるアメリカンドリームを高く評価し、自分の存在は「アメリカにおいてのみ可能である」と断言する。しかし、トクヴィルはこうした政治的風土が生み出すネガティブな側面である個人の私的生活への埋没を警告したし、ハーツもまた、アメリカの絶対的自由主義精神が人々の視野を狭めてしまう点を問題視し、それを超える必要性を訴えていた。オバマのアピールにもまた、そうした自由主義の負の側面を問題化する思想を見て取れることは、本稿の考察で示した通りである。

とはいえ、少なくとも現在のアメリカ人は、一方で連邦レベルにおいて個人主義を金科玉条とする政党政治がもたらした政治空間の狭隘化に危機感を抱くほどには現実的であり、他方で

オバマによる「連帯」のアピールに「一体感」と「希望」を見出すことができるほどには理想的である。その意味で、オバマの基調演説と、それに「共感」し涙を流すアメリカ市民の姿に、トクヴィルがアメリカの民主政治を楽観視し得たのと同じ素地と、現代アメリカの政治空間を広げる「風穴」を認めることは、十分に可能であろう。

(1) オバマのイリノイ州上院の活動中から、長く彼の政治的支援者であるイリノイ州上院議長、ジョーンズは、彼の演説に涙を流した一人だったし、現シカゴ市長のデイリー（民主党）、イリノイ州知事（共和党）らもこの演説の後、オバマは「もはや『rising star』（成長株）ではない、彼はスターである」と口をそろえた（“Obama has arrived. Illinois Dem say,” *Chicago Sun-Times*, July 29, 2004）。また、彼の選挙活動を支援した（二〇〇八年大統領選では予備選でオバマと争うことになる）協力者、ヒラリー・クリントン上院議員は、「覚えている党大会の中で、最も衝撃的な瞬間の一つだった」と絶賛している（“Democrats need more than speech from Obama,” *Chicago Sun-Times*, July 29, 2004）。

(2) この基調演説の全体は、

[http://www.barackobama.com/2004/07/27/keynote_address_at_the_2004_de.php] 「*Barack Obama*」の演説は以下のサイトで聴くことができる。

[http://www.americanrhetoric.com/speeches/convention2004/barackobama2004dnc.html]

(3) [http://tokyo.usembassy.gov/j/p/upj_elec2004convention.html]

(4) Aki Nagakura, WashingtonDC 同時代記:

[http://www.wjwn.org/activities/naganuma/mypage/archive06_13.html]

(5) Ibid.

(6) このフレーズは、彼の所属するシカゴのトリニティ教会 (Trinity United Church of Christ) の牧師の言葉から借用したものである。Joe Klein, *Time*, May 14, 2007.

(7) 最新のギャラップ調査によれば、民主党予備選候補者の支持率は、クリントンが四八%、オバマが二六%、エドワーズが一三%と、クリントンが二二ポイントの差をつけてリードしている。クリントンとオバマのどちらを支持するか、という二択の質問に対しては、五九%がクリントン、三六%がオバマを支持している。今後の支持率の変動が注目されるようである (*Gallup News Service*, August 9, 2007 [http://www.galluppoll.com/content/?ci=28345])。

(8) Joe Klein, "Barack Obama: A young yet audaciously thoughtful U.S. Senator makes his run at history," *Time*, May 14, 2007.

(9) 本稿では、アメリカの二大政党政治の成り立ちに関する理論的考察を避け、政党を介した現代アメリカ政治社会の現状を中心に議論している。政党は、アメリカに無数に存在する「自発的結社」の一つとして社会における利益の代表・集約を行い、政治リーダーを補充・育成・提供し、さらに市民教育という機能を備えている。すなわち、政党はその機能に市民との相互作用を含むためにアメリカ社会の形成において本質的な重要性を持つ。これらを踏まえ、本稿のタイトルにも含まれている「政党政治空間」が射程とするのは、「選挙」を媒介とする政党支持基盤の変動や主要政党の勢力関係の再編成の過程で、政治社会における価値体系、政治的言説の形成(更新)・変容という「現象」が生起する場所である。その際、他の自発的結社と政党との関係は射程外とするが、政党政治(選挙政治)の言説空間において利用される団体や結社はその限りではない。また、投票行動、政党支持、政党動員等の専門分化した領域にも特化した考察は行っていない。したがってここでいう「政治空間」とは、広義には「個人」から「国家」を読み解く際の便宜的次元、狭義には自由や平等といったアメリカ特有の政治的

- 価値や、市民・政党間関係の歴史的变化（あるいは「市民」「政党」概念の変容）と共に可変的な次元である。なお、現代アメリカにおける有権者の支持態度の変容と投票行動に関しては、拙稿「現代アメリカの有権者像——SRC (Survey Research Center) 調査を中心として」、北大法学研究科『ジュニア・リサーチ・ジャーナル』No. 10¹ 二〇〇四年、二一—四〇頁を参照¹⁰⁾。
- (10) “Transcript: Illinois Senate Candidate Barack Obama,” *Washingtonpost.com*, July 27, 2004.
- (11) イリノイ州上院時代のオバマの功績として、たとえば警察の尋問室におけるレイシャル・プロファイリングを防止するために監視カメラを設置する法案をまとめた。州警察によるマイノリティへの不当な権力行使を指摘し、ACLU (アメリカ市民的自由同盟: American Civil Liberties Union) ‘Mexican American Legal Defense and Education Fund’などの支持を受け法案化に成功する。そのプロセスは州警察や共和党市長の圧力によって、困難を極めた (Barack Obama, *The Audacity of Hope* [New York: Crown Publishers, 2005], pp. 57-58. (邦訳: バラク・オバマ (棚橋志行訳) 『合衆国再生——大いなる希望を抱いて』ダイヤモンド社、二〇〇七年。以下本文中の引用は、石神の訳文による。)) “Racial Profiling” Target of Bill,” *Chicago Tribune*, December 7, 1999, online archive)。しかし、彼は原則の尊重を欠くことなくプラグマティックに「良い妥協」を成立させたとして、評価されている。
- (12) Election Results for U.S. House seats from Illinois, *Federal Elections Commission*.
- (13) William Finnegan, “The Candidate, How the son of Kerryan economist became Illinois Everman,” *The New Yorker*: Fact, May 24, 2004 [http://www.newyorker.com/fact/content/?040531fa_fact].
- (14) Obama, *The Audacity of Hope*, pp. 105-106.
- (15) 二〇〇〇年選挙敗退後、二〇〇一年九月末、彼は自身の名前、‘Obama (オバマ・オサム)’と、‘ミドルネームである “Husein (フセイン)” が持つメディア的不運をコンサルタントに指摘される。さらに選挙に勝利するための資金や、政治の世界における種の取引の必要性を認識しながらも、そうすることで彼が重要だと考える税金やヘルスケア、雇用等の問題から遠ざかっていく日々に、ある種の挫折を感じていた。しかし彼には常に沸きあがる政治へのアイデアと熱意があった。家族や妻との話し合いの中で、彼は二〇〇四年を「(国政への)最後の選挙 (last race)」として挑んだ。(Obama, *The Audacity of Hope*, pp. 4-5)。
- (16) 同、民主党予備選に出揃った候補者 (Dan

- Hynes, Maria Pappas, Blair Hull, Gery Chico, Joyce Washington) のうち、オバマは「黒人女性のワシントンを大きく引き離し当初から圧倒的な黒人コミュニティの期待を受け、有力視されていた」(「What gives Obama hope is the clear favorite of informed voters,」*Chicago Sun-Times*, August 18, 2003, pg. 41)。
- (17) “Alan Keyes becomes GOP’s burden,” *Chicago Tribune*, September 5, 2004, online archive.
- (18) Obama, *The Audacity of Hope*, p. 18.
- (19) [http://www.cnn.com/ELECTION/2004/pages/results/states/IL/S/01/epolls.0.html].
- (20) BarackObamaCongresspedia : [http://www.sourcewatch.org/index.php?title=Barack_Obama].
- (21) [http://www.cnn.com/ELECTION/2004/pages/results/states/IL/S/01/epolls.0.html].
- (22) イリノイは、その政治文化において大きく三つに分けられる。イリノイ南部は、一九世紀初頭、主にアパラチア山脈地帯から土地を求める貧農が移住し、生活の中心は伝統的な家族と教会であった。深南部と同様、奴隷制は聖書の下で正当化されていた。一方、北部にはニューイングランドからヤンキーが北部文化の基礎を形成した。彼らにとって教会は神の意思を体現するために世俗的なパワーを利用する場であり、神の意思のもとで、いかにして効率的に生活するかという規範の下、自発的グループを通じたコミュニティ参加を重んじる文化が涵養された。中東部の文化は、その二つの文化が混合されたものになる。一方で、こうした文化的相違は、戦後徐々に緩和されつつある (Frederick M. Wirt, “The Changing Social Bases of Regionalism : Peoples, Cultures, and Politics in Illinois”, Peter F. Nardulli, ed., *Diversity, Conflict, and State Politics-Regionalism in Illinois*, [Urbana and Chicago : University of Illinois Press, 1989] pp. 31-37, p. 57)。
- しかし、オバマは九七年にイリノイ南部を訪れ、南部はまるでリトルロックやルイスヴィルのようだ、つまり「レッド」(共和党のカラー)の深い影を残す (a deep shade of red) 地域であるとの感想を残している (Obama, *The Audacity of Hope*, p.49)。
- (23) 大統領選挙の分析においては、一九九二年以降、共和党が優勢な州と民主党が優勢な州が固定化しており、前者はレッド・ステーツ、後者はブルー・ステーツと最近では呼ばれている。(細野豊樹「二〇〇四年米大統領選挙・連邦議会選挙の分析」『国際問題』No. 539、二〇〇五年二月、九頁)。
- (24) Obama, *The Audacity of Hope*, p. 49.
- (25) William Raspberry, “All Together, Now,” *The*

Washington Post, August 2, 2004, A17.

- (26) Perry Bacon Jr., "Barack Obama: The Future of the Democratic Party?," *Time*, April 18, 2005.

- (27) Raspberry, "All Together. Now."

- (28) アレクシス・ド・トクヴィル(岩永健吉郎・松本礼二訳)『アメリカにおけるデモクラシー』研究社、一九七二年、九頁。

- (29) ルイス・ハーツ(有賀貞訳)『アメリカ自由主義の伝統——独立革命以来のアメリカ政治思想の「解釈」』講談社学術文庫、一九九八年、二一頁。

- (30) 同上、二六頁。

- (31) トクヴィルによるアメリカ民主主義におけるアソシエーションの役割については、近年盛んに議論されている。代表的な業績を挙げるならば、ロバート・パットナムの『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』(原著二〇〇〇年)、シード・スコッチポルの『失われた民主主義——メンバーシップからマネジメントへ』(原著二〇〇三年)である。パットナムは、トクヴィルのアソシエーションの役割をソーシャルキャピタルという概念に置き換え、現代のアメリカ社会に警鐘を鳴らした。彼は、一九六〇年代以降の社会変化により、ソーシャルキャピタル——個人間の繋がり、およびそこから生まれる相互依存、信頼関係——が衰退し、民主主義を

維持するための市民の政治への関心・参加が低下していると嘆く。一方スコッチポルは、パットナムの算出した結社率や投票率そのものに疑問を呈し、六〇年代以降の「参加」における変化を、「結社」の低下ではなく、結社の性質と個人にとつての結社の意味と、社会における結社の機能の変化を指摘している。アメリカの民主主義の再興に向けてパットナムが重要視するのは、まさにトクヴィルが個人主義の行き過ぎの緩和剤とみなした地域的なアソシエーションの復活であるが、スコッチポルは現代社会における「組織」の意味をより現実的に精査し、単なる地域的な善行主義を超えた、ナショナルな制度改革を訴えている。かかる議論の本質は、結局のところアメリカの個人主義と民主主義の問題にあると思われる。本稿では、強力な個人と民主主義を支える紐帯・参加の精神の共存の実態と可能性を、バラク・オバマの個人的経験を用いて第三章で詳述している。したがって、本稿が個人と国家の間から今日のアメリカを見直そうとする試みの一部でもあることを付言しておきたい。

- (32) トクヴィル、一〇三頁。

- (33) 阿部斉「アメリカ政治における都市と郊外」『アメリカ研究』No. 28、一九九四年、三頁。

- (34) Graham Wallas, *The Great Society: A Psychological Analysis* (New York: Macmillan, 1915).

- (35) R・N・ベラー、R・マドセン、W・M・サリヴァン、A・スウィドラー、S・M・テイプトン(中村圭志訳)『善い社会——道徳的エコロジーの制度論』みすず書房、二〇〇〇年。
- (36) Transcript : Illinois Senate Candidate Barack Obama. *Washingtonpost.com*. July 27, 2004 [http://www.washingtonpost.com/wp_dyn/articles/A19751_2004Jul27.html].
- 以下、オバマの演説部分についてはすべて括弧付けで、上記トランスクリプトからの引用である。
- (37) R・N・ベラー、R・マドセン、S・M・ステイプトン、W・M・サリヴァン、A・スウィンドラー(島蘭進・中村圭志共訳)『心の習慣——アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房、一九九一年、六七七頁。
- (38) 同上、七頁。
- (39) シカゴのメディアには、選挙戦の前から、オバマの『希望の政治』というメッセージが、広範囲の支持者にアピールしていることを指摘するものもある(『Politics of hope' appeals to wide range of supporters,' *Chicago Daily Herald*, October 25, 2004, pg. 1)。
- (40) ベラー『善い社会』一八頁。
- (41) 同上、同頁。
- (42) Obama, *The Audacity of Hope*, p.55.
- (43) Robert Huckfeldt and Carol Weitzel Kohfeld, *Race and the Decline of Class in American Politics* (Urbana and Chicago : University of Illinois Press, 1989), pp. 15-16.
- (44) Edward G. Carmine, James A. Stimson, *Issue Evolution : Race and Transformation of American Politics* (Princeton, N.J. : Princeton University Press, 1989), pp. 165-166.
- (45) ウォレスの運動は、当初公民権運動の高まりに対抗する南部白人層を基盤としていたが、やがて北部における黒人暴動や増加する犯罪を危惧する広範な中間層の支持を集め、人種問題や南部という特定地域を超えて、影響力を拡大していった。ウォレスに関して重要な含意は以下の三つになる。第一に、ニューデイル・リベラリズムに反対するゴールドウォーターとニュー・リベラリズムに反対する勢力の支持を受けたウォレスの二派が七〇年代のニューライトを形成し、ニューデイル連合の崩壊を促す保守運動の先鞭をつけた(平田美和子「ニューデイル連合の崩壊」藤本一美編『アメリカ政治三〇年の検証』行研、一九九〇年、六二頁)。第二に、黒人票の重きを無視できない南部民主党の「リベラル化」の一方で、白人の民主党支持者の大量「転向」、レーガン・デモクラット化が民主党の弱体化を招いた。しかし、深南部においてこの動きを食い止めたのが一貫して保守的立場を堅持したウォレスであった。彼の反動的姿勢は、

- 八〇年代には勢いをなくし、むしろリベラルな装いで再登場した。つまりウォレスの左への「転向」は、民主党指導部の「リベラル化」、民主党の「黒人政党化」を如実に示すものである(松岡泰『アメリカ政治とマイノリティ——公民権運動以降の黒人問題の変容』ミネルヴァ書房、二〇〇六年、九六頁)。第三に、ウォレスの運動を「普通の働く人民」による「法と秩序」の要求と言う側面において、巨大な「敵」を想定する点において、そして都市的なコスモポリタニズムに本能的反発を示す点において、(さらにその運動が政治的挫折を余儀なくされた点において) ポピュリズムの系譜に位置づける視点である(古矢旬『アメリカニズム——「普遍国家」のナショナリズム』東京大学出版会、二〇〇二年、七五頁)。
- (46) R・イングルハート(三宅一郎・金丸輝男・富沢克訳)『静かなる革命』東洋経済新報社、一九七八年。
- (47) 同上、三〇頁。
- (48) カーマインズとスティムソンの他に、John R. Petrocik, *Party Coalitions* (Chicago: University of Chicago Press, 1981)を参照。また、アメリカの政治における「階級」の衰退と「人種」の表出を、投票行動の社会学的考察を用いて政党政治のメカニズムを検証したものとして、Robert Huckfeldt and Carol Weizel Kohfeld, *Race and the Decline of Class in American Politics* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1989)がある。
- (49) 中島和子『黒人の政治参加と第三世紀アメリカの出発』中央大学出版会、一九八九年、二六四―二六五頁。
- (50) Sam Roberts, *Who We Are Now: The Changing Face of America in the Twenty-first Century* (New York: Times Books, 2004), p. 172.
- (51) 古矢、前掲書、一七五頁。
- (52) 中野博文『呪縛としての自由——保守主義時代を招いたアメリカ特有の政治風土』、岡住正秀・中野博文・久本尚志編『たたかう民衆の世界——欧米における近代化と抗議運動』彩流社、二〇〇五年、二七五頁。
- (53) 同上、二七二―二七三頁。
- (54) トマス・B・エドソール、メアリー・D・エドソール(飛田茂雄訳)『争うアメリカ——人種・権利・税金』みずす書房、一九九五年、一〇―一二頁。エドソールは、人種問題が、福祉・権利・税金といったほかの問題とむすびつき、分裂と融合の「連鎖反応」を引き起こしている」と指摘している。
- (55) 同上、三三三頁。
- (56) 同上、同頁。
- (57) 松岡泰『アメリカ社会の変化と黒人問題の変容』、五十嵐武士・古矢旬・松本礼二編『アメリカの社会と政治』有斐閣ブックス、一九九五年、一五五頁。

- (58) 松岡、前掲書、三五頁。
- (59) 松岡、前掲書、七〇―七一頁。
- (60) Huckfeldt and Kohfeld, p. xi.
- (61) 松岡、前掲書、三四頁。
- (62) 松岡泰「黒人にとつての民主党問題——黒人社会・運動・民主党のダイナミクス」、久保文明・草野厚・大沢秀介編『現代アメリカ政治の変容』勁草書房、一九九九年、二四二頁。
- (63) 同上、二四三頁。
- (64) Lucius J. Barker, *Our Time Has Come: A Delegate's Diary of Jesse Jackson's 1984 Presidential Campaign* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1988), p. xiii.
- (65) American Rhetoric: Jesse Jackson 1984 Democratic National Convention Keynote Address [http://www.americanrhetoric.com/speeches/jessejackson1984dnc.html]. 以下、ジャクソンの演説部分はすべて括弧付けで、上記のトランスクリプトからの引用である。
- (66) 松岡、前掲書、六九頁。
- (67) 同上、同頁。
- (68) 同上、七〇頁。
- (69) 一九六五年投票憲法は、八二年の修正によって各州に少数民族出身者の連邦議員が出やすくなるような選挙区割りの創設を促した。同法は、黒人の選挙権のみではなく、その後少数民族の代議権を保証する強力な武器となっていた。ジャクソンを代表とする黒人活動家たちは、民主党全国委員会の委員に占める黒人数、民主党全国大会に出席する黒人の代議員の割当数とその算定方法、予備選挙での決選投票制度、選挙区制度など、改正案を出して、認めさせていった(松岡、前掲書、六九頁)。
- (70) 松岡、前掲書、七〇頁。
- (71) エドソール、エドソール、前掲書、三三二頁。
- (72) American Rhetoric: Jesse Jackson 1988 Democratic National Convention Address [http://www.americanrhetoric.com/speeches/jesse-jackson1988dnc.html]. 以下八八年のジャクソンの演説部分は、上記のトランスクリプトからの引用である。また、八八年四月のニューヨーク・タイムズ紙は、ジャクソンのアピールが「怒りのレトリック (the rhetoric of anger) から希望の対話 (the dialogue of hope) へと移行」し、それが彼の大きな勝利をもたらすだろう、と論評している(“What Jesse Jackson Has Won,” *The New York Times*, April 21, 1988, Section A: Page 30)。
- (73) American Rhetoric: Jesse Jackson 1988 Democratic National Convention Address.
- (74) ベラー『善い社会』、二五頁。
- (75) 同上、同頁。

- (76) ベラー『善い社会』、一七頁。
 (77) Obama, *The Audacity of Hope*, p. 37.
 (78) Ibid.
 (79) Ibid., p. 40.
 (80) Barack Obama. com., “My Plans for 2008” (スーリハ
 ナリスト)
 (81) Transcript of Barack Obama’s Speech, Springfield, Ill.,
 February 10, 2007 [http://www.cbsnews.com/stories/
 2007/02/10/politics/main2458099.shtml].
 (82) Barack Obama, *Dreams from my Father : a Story of Race
 and Inheritance* (New York : Three Rivers Press, 2004),
 pp. 136-138, Bob Sector and John McCormick, Portrait of
 a pragmatist : As a raw community organizer in Chicago
 in the 80’s, Obama preached reaching out to attain goals
 (*Chicago Tribune*, March 30, 2007, online archive).
 (83) Obama, *Dreams from My Father*, p. 133.
 (84) Ibid., pp. 146-150.
 (85) Ibid., p. 147.
 (86) Ibid., p. 150.
 (87) Bob Sector and John McCormick, *Chicago Tribune*,
 March 30, 2007.
 (88) Obama, *Dreams from My Father*, p.220.
 (89) オバマは、ロースクール入学後には、黒人として初め

- て「ハーヴァード・ロー・レビュー」の編集長を務めて
 いる。Perry Bacon Jr., *Time*, April 18, 2005.
 (90) ベラー『心の習慣』、一八六頁。
 (91) 同上、一九二頁。
 (92) 同上、一九二―一九三頁。
 (93) Obama, *Dreams from My Father*, p. 248.
 (94) Bob Sector and John McCormick, *Chicago Tribune*,
 March 30, 2007.
 (95) Obama, *The Audacity of Hope*, p. 232.
 (96) 人種ごとの収入、賃金格差における黒人の不平等的処
 遇に関しては、Sam Roberts, *Who We Are Now*, pp. 172-
 173. また、人種ごとの政治的代表(議会議員割合)は、
*Congressional Quarterly’s Guide to U.S. Elections, Fourth
 edition*, 2001, pp. 791-793. を参考。
 (97) Obama, *The Audacity of Hope*, pp. 232-233.
 (98) Ibid., p. 243.
 (99) Ibid., p. 248.
 (100) Ibid., p. 254.
 (101) Ibid.
 (102) 第二次大戦を契機として、南部農業の機械化等により
 離農を余儀なくされた黒人たちは、雇用を求めて北部都
 市、特にその中心であるシカゴへと向かった。シカゴで
 は、一九四〇年には三〇万人程度であった黒人人口が、

その後二〇年間で八〇万人以上に急増している。彼らの最初の居住区は主にウエストサイド、ニアウエストサイドで、人口過密と住宅不足に陥ったゲッター地区は荒廃を極めた。

(103) Ibid., p. 255.

(104) Ibid., p. 245. 人種と食生活をつなげる。こうした認識は、六〇年代以降の「平等主義」に基づく政党政治が生み出した権利保護の国家体制が発展する中で生じた「新しいタイプの差別意識」に基づいていると思われる。肌の色で差別をしないとする保守主義者は、肥満が低所得の有色人種に多いことを見て、自己管理ができないのは意識が低い証拠だと考えてしまう。実際、有色人種が多くすむ大都市中心部に肥満者が多いのは統計的事実であるが、こうした肥満問題の背景には、彼らの住むネイバーフッドに安価で高カロリーなハンバーガーを売るファスト・フード店やスナック菓子売る雑貨屋しかないことがある。郊外の新鮮な野菜を売るスーパーに、自動車を持たない彼らが交通機関を使っていくことは難しいし、彼らが高価で空腹を満たせないサラダに手を伸ばすことは考えにくい(中野博文「人種」をめぐる権利政治——二〇世紀アメリカ国家とその市民像」、『アメリカニズムと「人種」』名古屋大学出版会、二〇〇五年、三二六頁)。なお、中野論文は、こうした差別の生成を社会保障法の

事例に拠って解き明かしたリーバーマン (Robert C. Lieberman) における「社会保険受給資格を持つ勤労市民と資格を持たない市民の二分化の構造」に言及し、有色人種の福祉依存を批判し、政治の争点としていったのは保守主義者であるが、貧窮した人種集団を他のアメリカ人の負担にならない経済的に自立した市民へと「成長」させようとした——自己の労働で生活のできないものを全うな市民と認めない——点で、自由主義者もまた保守主義者と共通している、と指摘している。

(105) Obama, *The Audacity of Hope*, p. 245.

(106) ベラー『心の習慣』、七頁。

(107) 同上、八五頁。

(108) 同上、同頁。

(109) 同上、同頁。

(110) Arnold R. Hirsch, *Making the Second Ghetto: Race and Housing in Chicago 1940-1960* (Chicago & London, University of Chicago Press, 1998), p. 2.

(111) Ibid.

(112) James A. Morone, *Hellfire Nation: The Politics of Sin in American History* (New Haven: Yale University Press, 2003), p. 13.

(113) 中野、前掲論文、三二五頁。

(114) ベラーは、『心の習慣』でもこう言っている。「私たち

がインタビューした人々のほとんどすべては、仕事や愛や共同体における他者とのつながりが、幸福や自尊心や道徳的価値にとってなくてはならぬものだという考えに同意しているのである（ベラー『心の習慣』、一〇一頁）。

(115) Transcript, Obama.